

武藏名所考

春

4290.3
7

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

晃嶠陳人著

武藏名所考



江戸書林

千鍾房
青藜閣

本州之勝區入於古歌
詠者率皆遷移沿革
多不猶昔霞関則侯邸
駢比墨水則人煙蕃庶
忍岡之蘼蕪芟為紺苑
武野之曠漠犁為白田

固雖雍熙使然而汲古者惑焉况掘兼井之猶為棄井狹山池之竭矣自頻立野之駟玉里之布不詳其處如是之類皆不可不闡發也余嘗

蒐羅諸說編摩商榷附以臆斷釐為四卷名曰武藏名所考顧茲孱陋豈足眎人聊存思古之慨以颺文化日闢之美云

文化丁丑杓月晃崎陳

人編次



朱葦三亥書



武藏名所考凡例

一名所和歌を輯録せしむ僧宗願の勅撰名
所和歌抄墨村昌琢の類字名所和歌集僧澄
月歌枕名寄僧宗憲の松葉名所和歌集僧
西順の歌林名所考ふところを其の魁とす
今所のしるふところは據まりされをけり
書に載ると載せざるを以て示し其乃
おせざるもの宮崎山霞崎以知伊津の如き
名文集に據りまは岩瀬渡のこま六先

此等或書りり武藏之といひて一に據るこれを証と
一名西のはひてある延喜式和名抄の郡乃次第に據
まり但葛飾郡ハむの〜下總よて今武蔵に属
し〜これハ最後は裁へる事とそこの地豊島に隣り
きこれハいんちよ便よきんより〜これうべに法いてたり
一和歌を載るものこれ五郡各多少なきにあり
今これとまじり合さ〜ゆ〜ゆ〜ゆのハ本集よ
物き証出せらる色ありけり

一玉河玉河里狭山狭山池都筑郡都筑邑部

筑里とて然りまよぬ〜ゆ〜ゆ今五郡と
並〜ゆ〜ゆの舊に法〜ゆ〜ゆ能り但
む〜ゆ〜ゆの系立郡の系隅田河系れ〜ゆ〜ゆ
あよ系あるん〜ゆ〜ゆこれを贅せと
一む〜ゆ〜ゆの向園堀の井邑部の系ある〜ゆ〜ゆ
あるあ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
の〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ
の〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ

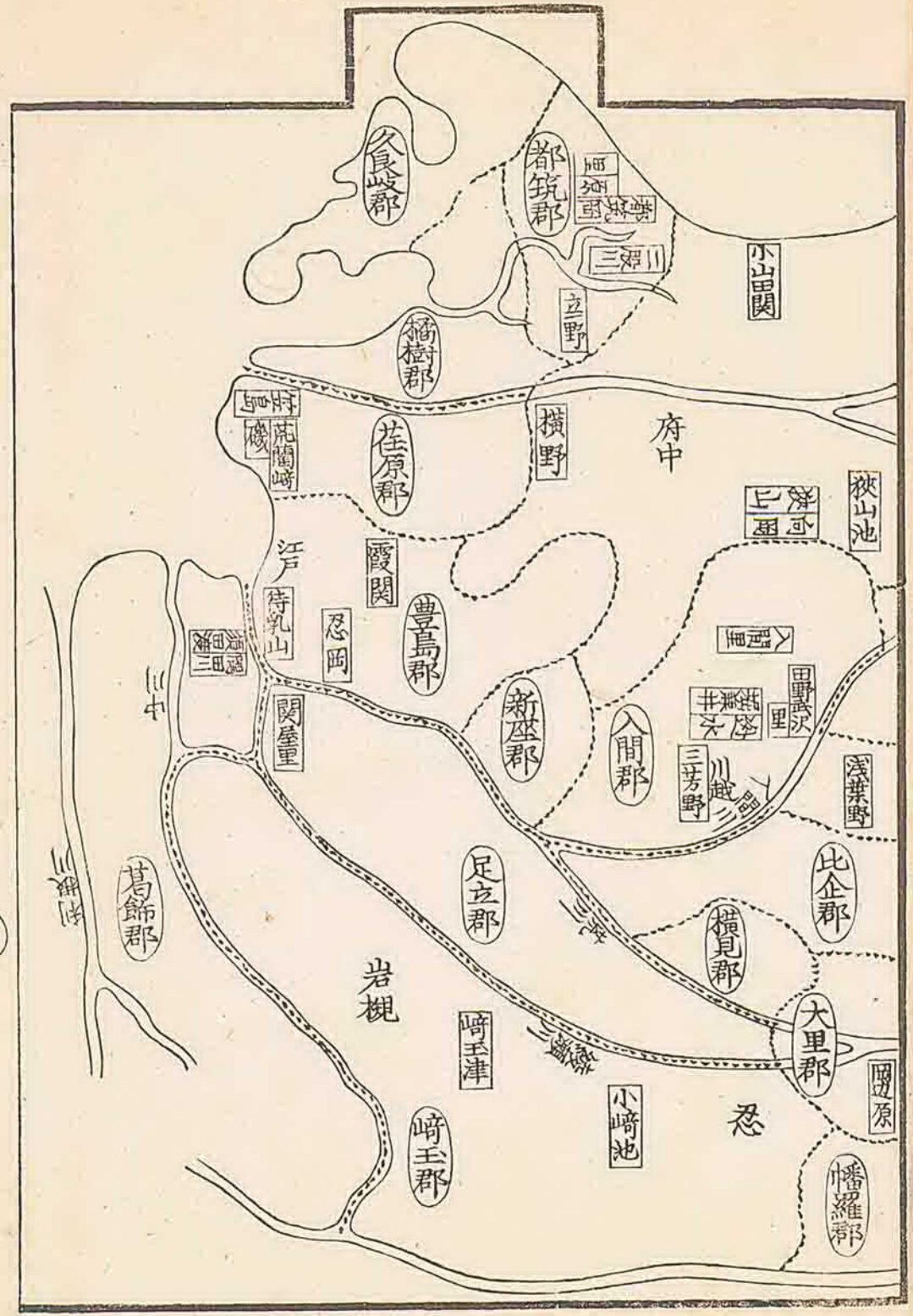
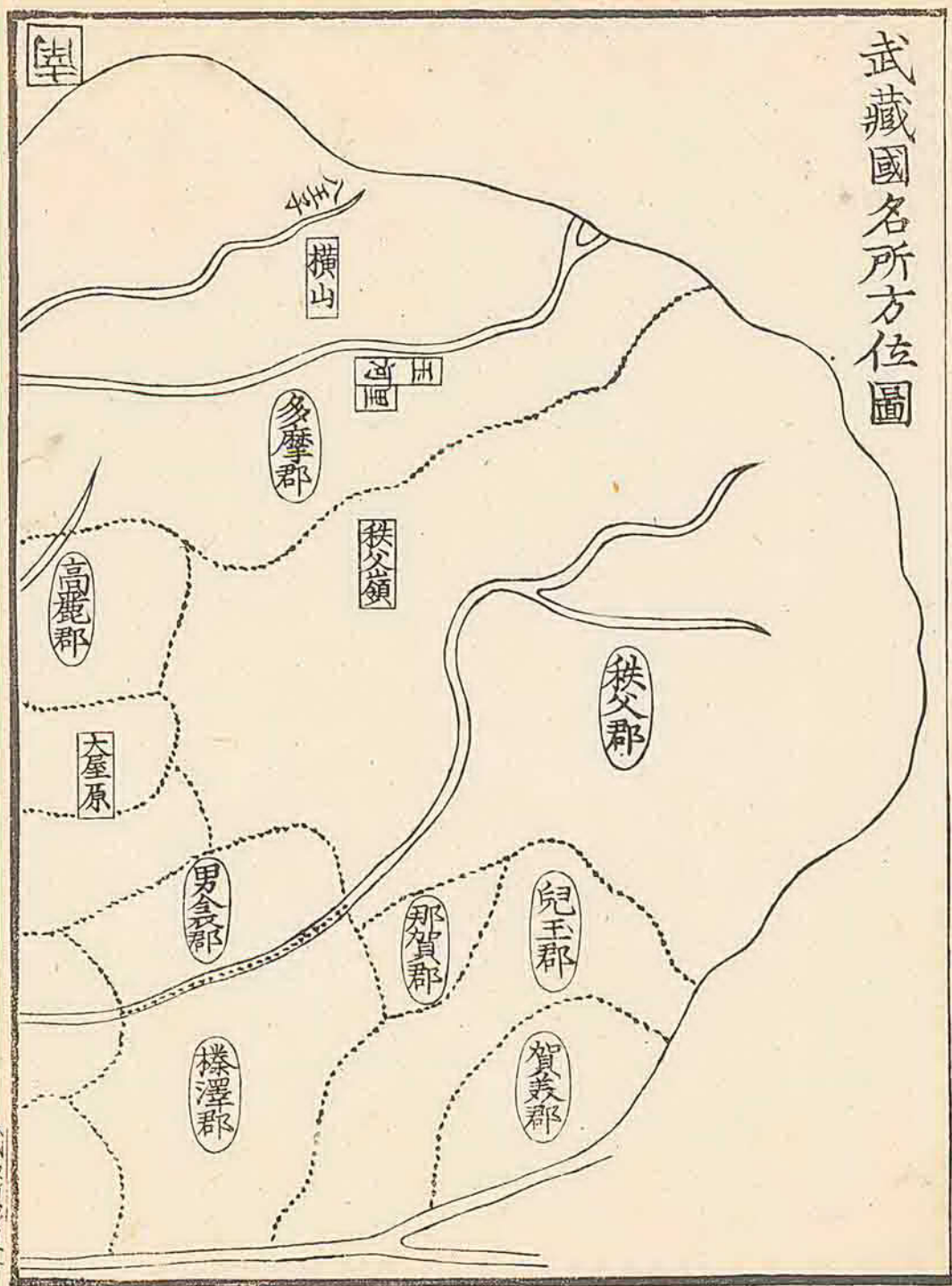
一 不詳の歌も同じく歌をいふ詩のむねに
まじりたるものもなほ詩の歌に同じく
歌をいふこととて強きものなりとて
爰例ありこれよむ川の歌を多くして
のこよめる歌をよむゆゑあり又まじりたる
詩よむ川をよむはけあるものなり山を辨基り
歌よむありとてなるといふなり

一 吾妻鏡に載る横山氏都筑氏須田氏浅羽氏品部
氏等の人名は録す各處の下に出る事法附

會とていふものと後の考よとていふ高よとていふ

一 和歌の法といふ其作者の世次をのこす作者部類
大系圖等といふこととていふを集中の事とていふ
掬といふこととていふは歌をいふ集のむねに
これとていふ集に載るものなりとていふは
一 名所の事実を載るもの近頃撰とていふ書といふ
こととていふ和歌といふこととていふは長とていふ
こととていふ義ありとていふはたの煩とていふもの

武藏國名所方位圖



武藏名所考引書目

日本書紀

續日本紀

延喜式

和名類聚抄

武藏風土記

常陸風土記

拾芥抄

吾妻鏡

神明鏡

源平盛衰記

義經記

北條九代記

太平記

關東治亂記

北條五代記

畠山系圖

武藏七黨系圖

小田原北條氏今限帳

萬葉集

仙覺萬葉集抄

萬葉集拾穗抄北村季吟

萬葉集代匠記僧契冲

古今和歌集

後撰和歌集

拾遺和歌集

後拾遺和歌集

金葉和歌集

詞華和歌集

千載和歌集

新古今和歌集

新勅撰和歌集

續後撰和歌集

續古今和歌集

續拾遺和歌集

新後撰和歌集

玉葉和歌集

續千載和歌集

續後拾遺和歌集

風雅和歌集

新千載和歌集

新拾遺和歌集

新後拾遺和歌集

新續古今和歌集

新葉和歌集

大伴家持卿集

伊勢家集

紀實之集

藤原兼輔卿集

藤原元真集

壬生忠見集

藤原長能集

大中臣能宣朝臣集

曾禰好忠集

藤原實方朝臣集

源俊賴朝臣集

山家集

月清集

俊惠法師集

拾玉集

藤原俊成卿集

鴨長明家集

長明百首

後鳥羽院御集

土御門院御集

式子內親王集

拾遺愚草

藤川百首

玉吟集

壬二集

藤原光經卿集

藤原為尹卿千首

草菴集

續草菴集

慕京集

古今和歌六帖

堀河百首

永久四年百首

六百番歌合

老若五十首

千五百番歌合

建仁五十首

正治二年百首

建保百首

建保名所百首

現存和歌六帖

雲葉和歌集

夫木和歌集

貞治五年關白家歌合

現葉和歌集

題林集

勅撰名所和歌集

類字名所和歌集

類字名所補翼抄僧契冲

歌枕名寄

松葉集

歌林名所考

伊勢物語

真名伊勢物語

勢語臆斷僧契冲

源氏物語

大和物語

枕草紙

八雲御抄

藻鹽草

更級日記

異本更級日記

撰集抄

都土產僧宗久

旅日記僧宗久

北國紀行僧堯惠

回國雜記道興准后

宗祇諸國物語

東路土産僧宗長

靜勝軒詩跋僧靈彦

惺窩文集藤原肅

羅山文集林忠

日本事蹟考林恕

竹齋物語齋藤德元

江戸童

國名風土記

續無名抄岡中西惟中

木曾路記貝原篤信

江戸鹿子

江戸砂子菊岡房行

本朝俗諺誌菊岡房行

武藏野地名考田澤義章

名所方角抄僧宗祇

宗祇終焉記僧宗長

武藏野紀行平氏康

梅花無盡蔵僧萬里

舉白集豐臣勝俊

丙辰紀行林忠

日光紀行藤原光廣卿

紫一本

勝地吐懷編僧契冲

玉櫛笥

淺草寺緣起

江戸名所話

再訂江戸鹿子奥村氏

再按江戸砂子丹治庶智

諸國里人談菊岡房行

南向茶話酒井忠昌

求涼雜記酒井忠昌

江戸名勝志藤之

郡名考青木敦

江戸志近藤義博

武藏志料山岡明阿

駿河國志柳原長俊

駿州名勝志川合長行

武藏演路大橋方長

長祿年中江戸圖

江戸往古圖說大橋方長

武藏堀兼井事實僧亮盛

狹山觀音順禮記僧亮盛

武藏志稿

埼玉郡記

甲斐名勝志萩原元克

武江披沙大田單

三芳野名所舊跡記

四神地名錄古河辰

隅田川考中神守節

武野遊草石永貞

武藏國村附

武藏名所考目次

第一卷

武藏野

右無郡可屬

都筑郡

都筑岡

二股川

右都筑郡

第二卷

都筑原

都筑里

立野

玉河

玉河里

向岡

狹山

狹山池一名箱池

小山田關

横山

横野

右多磨郡

荒藺崎

荒藺磯

笠島

右荏原郡

忍岡

忍杜

霞關

待乳山

右豊島郡

第三卷

葛飾

角田河

廬崎

須田渡

右葛飾郡

關屋里

右足立郡

第四卷

堀兼井

入間里 附入間河

田能武里

淺葉野

右入間郡

崎玉津

右崎玉郡

岡部原

右榛澤郡

武藏嶺

右秩父郡

氷川

海比

猪名河

阿賀須沼

岩瀬渡

霞崎

曝井

遜水

田能武澤

三芳野

大屋原

小崎池

蝦手山

原田里

大我井杜

古江浦

宮崎山

以知伊津

右郡未勘

武藏名所考卷一



武藏野

昆嶠陳人編

勅撰名所和歌抄類字名所和歌集歌枕名寄松葉集
歌林名和考並凡武藏野武藏と載之但名所抄八
武藏野原代あけ武藏と注凡類字名之別亦武藏
野原と河けり

萬葉集之云武藏野又牟射志野

八雲御抄之云武藏野武藏

建保三年内裡名所百首目錄之云武藏野武藏

藤原草子云むさし一燈又むさし一の原

伊勢物語云むさし一男有りあり人のむさしめ汝と
そくむさし一燈人あり神よぬと人あり事れと國の
ちんかろえらぬまけり女をちまむさしの中と並てめけ
と事りそりある人のこの神六ぬと人ありと火と法をん
とん

吾妻鏡云建永二年丁卯三月武藏國荒野等可
令開發之由可相觸地頭等之趣被仰武州廣元朝
臣奉行之

又云仁治二年十月廿二日以武藏野可被闢水田之
由議定訖就之可被懸上多磨河水之間可為犯土

之儀欵將又將軍家御沙汰欵可為私計欵賢慮猶
難被一決仍今日前武州召陰陽師恭貞晴賢等朝
臣被示合各一同申云堰溝耕作田畠事者雖不及
土用方角沙汰於此事者已為始御沙汰欵可謂大
犯土者欵雖非將軍家御沙汰私御方違可宜欵若
可為國司沙汰乎云云前武州又被仰曰雖似沙汰
耕作之後者為御所御計可賜人々然者可為御所
御沙汰北方當時王相欵自明年又可為大將軍方
可見定御方違御本所云云為武藤左衛門尉頼親
奉行相具恭貞晴賢行向武藏國海月郡自彼所猶
為北方云云即兩人歸參于前武州亭申此由以秋

田城介所領同國鶴見郷可為御本所之旨恭貞等
令一同之間可有入御之由攝津前司師貞毛利藏
人大夫入道西阿民部大夫入道行然佐渡前司基
綱出羽前司行義秋田城介義景太宰少貳為祐加
賀民部太夫康持等群議治定之後相副行義義景
於恭貞晴賢被申御所召入御前被聞食其子細仰
曰冬至以後鶴見相當良方可為王相方始御方違
于塞方事者有其憚冬至以前先可有渡御可被用
何日哉云云恭貞等申云來月四日可宜其後可有
立春御方違也云云四日天晴今朝將軍家為武藏
野開發御方違渡御千秋田城介義景武藏國鶴見

別庄

更級日記云云いふ事ありむさうの國とありぬことんとの
しきふもいふは深きとふあことなるくもなぐことひられ
やうしきくむさうたおやとさきく野も何いふまのさたぐ
ねひく馬にのわく弓のしるすもいふまぬまきく多く
おひしけりく中級もゆくに竹志を寺何り

撰集抄云云さき門ころ武藏野代さ侍りしに事柄
南の草花を養りし人をもさき武藏野代いりく
さされてさきくは綿をひらけしん知ら侍りく
むさう那六地けし秋のそそあにいつなる風の寒に
吹くんとさきくおひやりて侍りかこそやうくか入て

は侍たるをまかりく家居するあり

草菴集に云九月はさりり武藤時成る侍らとて武藤時成の御り末れきなれハ云云

太平記に云石堂禅門今夜我等の勢成引かて関よりむさく野に向く新田の人々と一にあり云云

又云新田武藏守武藤時成の山を居るを打除給ふ部のはとん云むさく野のときおきりしてれてその

赤へ道はまの信るとありさりりもみかかりてあ枕むすひくゆり侍りしははげしむも

人ありくこそくあやまきとさりされたりとさき世しうとさめてやせぬいハ昔のあはまひきそり

白波のあうりりさりりいり旗の床もそりうくとせ侍りし

静勝軒詩跋に云凡遊關左者必以見富士山過武藏野渡隅田川登筑波山則皆誇四方觀遊之羨也

山園紀行に云箕田といふ山あり武藤時成と名れ侍りのなり名れ侍りて後山あり

梅とるに箕田ハ是は郡箕田村あるハ侍系初めも箕田と云ふやまとい野園よりしりて入り

しなれハそれとも侍りて後山も多磨郡に在るくくそりのりとのせぬ

又云むさくの東のさうい忍園と優遊し侍遊

社五條天神と申侍り云々なすひ小湯為との小石有
又云むさうらひうち申せといふわく平重俊といふ
りよわしたよりて眺くふる朝霧をとりて入く膳をすふ
何の事をもたはる湯めを唯白雲のかきるとりたりと云ひて
又申やうりの里へかたり侍り云々漸日きかくゆりの
わりとよけれふるまはるあはれ志のきくお祓あつたあひか
とく侍りたるまはよたたく泡雲のきれるかとおほゆゆ
御とゆれまきうかひく侍り

田國雜記云むさうらひ月をあらえく云々ゆか
時とよきくおして云々あはの夜ハこの世にかり侍りて色れ
事記を枕かかきくすくゆとるまはあはれハ云々
武彦神と出く酒を飲て遊ひまはれとく云々雲雀
のあはれみく云々又むさうらひまはれに侍りたる原
里侍りかまはれもかりとく

按するふ淡路ハ即新産郡淡路村あるべし

名所方角抄云鎌倉より奥州へくると先登り
出ると武彦神の初るあはれ侍りより五言まかり一國
おとあはれ侍り鎌倉よりあはれ侍るなり國中のあ
云々申あはれ人あはれ侍りハ只神なり

諸國物語云武彦野のまより出く草庭と申す
き本誌もあはれ永き日かて候かた

東路のほと云武彦國かたぬまといふおとあはれ

因西之山寺あり其を武蔵野之杉本坊といふ武蔵野
の景氣をうりて同十五日氏忠三田孫 おりて息政定
これのれ物うらかていむさう一那の萩原の中流るるり
うてさ長尾孫右衛門方の館をうらうていれたるぬさ
神形をまて須賀谷といふ所と小泉掃部助の宿を
逗留しむさうの昔北中御あり

按さう勝沼といふ地名も多摩郡青梅村のまに
在神形城址も男倉郡白岩村と在須賀谷すれ
はら比企郡の須賀谷村あり

宗祇終焉記云文龜よりめれ年六月のとき駿河
國と一歩をこらり云云後に八九年れこのかこ山内扇谷
降楯の事ありさうおそく八ヶ國にてたれ道ゆ
人をもたやとかくはときさうさかたさおれつと有て
武蔵野をまゐるさう上舟をへて九月一日の頃と武後
國府といふりぬ

武蔵野紀行云むさう一社をこりおくれた事とさうひとま
さうのあつたさうとたさうさき女御花のあつたやとた
のさうとつたれをのさうさうり那り

丙辰紀行云名にわ武蔵野八月廿八日さうさう
とつたさうとつたさうとつたさう又茶茶茶なり
け國の稲毛葛西越谷岩流河越鴻巣忍平とまこれ
武蔵野の内とつた

日本事跡考云武藏國平原廣野不見山千村万落
雞犬相聞朝日夕日出沒草際

諸國里人談云嘗嘗一郡と云六中社の西代々本宇陀
野といふ事より府中の邊までの曠野あり

按さるるに代々ある中社の西あり以南南ありを
為郡と屬以宇陀野の地未考へと

武藏野地名考云古くも十郡と跨つてく福の秩父根
東の海北の河越南を向の國郡筑を常にならんとむ古
文書ありて證すと一而をさるるに以來民居村里と
あるといへるもむ一此秋の付の軍をのこりて平原を
一たたくまゝも一郡とも秋のちくこの花をけりて

武藏野と云は一の多もよんてさるは此中ありに
富士見塚といふあり言云又さるるにやうり歩あり
近路は府より府中北明神社地とありて七里中秋
の頃府中の秋と宿りて二拾五町少くはれと云々
月紙なる清原義経の影もあり一婦人の山を南の
表りののを後波の山は東山の志と云ふかありさるは
福をありさるるこれありとよめ此と云ふや

按さるるに十郡といふも多摩郡筑橋樹は原豊島
新座入間高森比企秩父等をもあらしん林羅
山の院より越谷岩筑鴻巣忍ふも皆武藏
野の内と云はれ比企秩父とのなき崎玉と云ふ加へ

十郡ありんか今考がし

又按ふる南へ向う國といふもの風土記の方位を合
はせ既向是れちよありんか

米涼雜記云武藏州の中なるゆき中州といふ往古
このむらう一郡も上野中州末州といふあり今上野
末州を詳あしん

按ふるに古歌にむらう一野のほききの郡せさう一野の地
兼の井むらう一むらうのふあふよらる類へいられも
ひらく此國の原野はさう一多るよく其ふと定ふる共
非るあふ一吾妻後大平記等にむらう一野といふは
又こより考ふるは多る郡より入間郡と連ふる地と

あはしく一國とかりくといひる事と入つては水國紀
行とむらう一野の東のさうい忍國とある一圓國雜記ふ
をむらう一野のむらうのむらうとある一むらうはむらうは
鳴新産まきう一むらう一野の内とむらうのむらう
地名考等れ説はこれよりなる事と定むまこ今入
間郡のむらう武蔵州郷と稱ふるもの上下赤坂上下松
系大井藤窪飛窪竹間沢鶴ヶ園大塚同新田序
柳新田十二村あり又むらう一野十七ヶ新田といひく久
米新田安松新田正沢新田岩園新田下田新田堀金
新田中新田堀の内新田加佐志新田三ヶ島新田諸園
新田猿新田長窪新田等れ村といひてきて
四村の名いきて
詳あしん

も下田村のりりに榊林大村系をとりて此武蔵野
の僅と存せるをめぐり三里ふあまるとのいひ又今も多摩
郡と野方原あり又中野といふ村二箇中野といふ村二箇を解
目野系に入野中野津野野上野をあらす村名あるをこれハ
むらへ多摩入間の二郡とてい多くも野ありといふ
たり續古今集下野の歌ふまゝ人ことごとこのりぬかれ
し名のゆゑにありぬむらゝの系又新後拾遺集
源頼房の歌中を多摩統河中とて讀み流儀かそてをまの
むらゝとて末を流まはるをそとていひていへる其地といひ
らぬ人の遠想とくよめぬもせよそのりぬありとて
あつらひむらゝといふ今も土人むらゝといふ八百里と

のりゝといひ傳ふる外との説は傳り説を抄の
廣きかゝらるあゝとていへるよとてむらゝとて十郡と
跨るともいふるまゝ也

又按するに武蔵野の系と此系とを合せたる事ハ延喜
式と交易雜物武蔵國紫草三千三百斤とあれいひぬ
へる武蔵野より穠生乃紫草多く産せりといふ知
る

讀人志々次 萬葉集

武蔵野のりりにむらゝとていひぬ

同

むらゝとていひぬむらゝとていひぬ

同

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

同

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

同

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

同

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

小野小町 續古今集

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

在原業平朝臣 家集

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

後人志 伊勢物語

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

源宗平朝臣 大和物語

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

伊勢大輔 家集

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

後人志 古今集

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

同

あはれ神のまはるをたのむに神のまはるをたのむに

紀貫之 後撰集

あまのついでにみづのたにをわたるるを
渡人よみ

武彦共神のいさなり命の若むらひを
渡人よみ 古今和歌六帖

あまのついでにみづのたにをわたるるを
かこの女房

あまのついでにみづのたにをわたるるを
藤原兼輔卿

あまのついでにみづのたにをわたるるを
九條右大臣 藤原師輔の

あまのついでにみづのたにをわたるるを
藤原元真 家集

あまのついでにみづのたにをわたるるを
壬生忠見 家集

あまのついでにみづのたにをわたるるを
藤原長能 家集

あまのついでにみづのたにをわたるるを
同

あまのついでにみづのたにをわたるるを
平兼盛 家集

あまのついでにみづのたにをわたるるを
平兼盛 家集

源順 家集

しるし野の駒津よも園山よりひうらこえて今都はつらん
大仲臣能宣朝臣文集

しるし野の昔れ秋さうつし極く若うさあとき世秋さうつ
如實法師 拾遺集

しるし野のまゝいんれしうつしあゆみのゆりとりんもこそ
主殿 藤原實方朝臣集

あつひ美人もる世と武都野のあゆみ何よりけり
讀人志ら 源氏物語

因

武都野のまゝいんれしうつしあゆみのゆりとりんもこそ

源師信朝臣 新後撰集

あつひ行く行末とわかれぬりとも月とさうるき武都野のあ

源定信

武都野のまゝいんれしうつしあゆみのゆりとりんもこそ

源師頼朝 堀川百首

しるし野のまゝいんれしうつしあゆみのゆりとりんもこそ

藤原顯季卿 家集

しるし野のまゝいんれしうつしあゆみのゆりとりんもこそ

藤原仲實朝臣 堀川百首

武都野のまゝいんれしうつしあゆみのゆりとりんもこそ

藤原顯仲朝臣

藤原のゆかりをよみしむる朝臣のふくむるありしを

俊子内親王女房河内

俊子の御所をよみしむる河内女房の御所を

藤原親隆卿 夫本集

藤原の親隆卿の御所をよみしむる夫本集

源俊頼朝臣

源の俊頼朝臣の御所をよみしむる源朝臣

同 散本集

武蔵の源朝臣の御所をよみしむる散本集

西行法師 新勅撰集

西行法師の御所をよみしむる新勅撰集

徳人志

徳人の志をよみしむる徳人志

藤原顯隆卿 六百番歌合

藤原の顯隆卿の御所をよみしむる六百番歌合

源頼政卿

源の頼政卿の御所をよみしむる源頼政卿

藤原範兼卿 建保名所百首

藤原の範兼卿の御所をよみしむる建保名所百首

藤原遠明 夫本集

藤原の遠明の御所をよみしむる夫本集

藤原清輔朝臣

むつたのうきくたのたのふくむつらる時もあるやの形

藤原隆季卿

あさめと秋もあつたむさくは清草押るるむらむる

後京極攝政
藤原良経云
新古今集

ひと清草むらむらのもさくはあきのけりよりのつらり

同 御集

むつたのうきくたのたのふくむつらる時もあるやの形

藤原俊成卿 夫木集

藤原俊成卿 夫木集

慈鎮和尚 拾玉集

むつたのうきくたのたのふくむつらる時もあるやの形

同

むつたのうきくたのたのふくむつらる時もあるやの形

同

武義郡のまはゆるはあつたむさくは清草押るるむらむる

同

あさめと秋もあつたむさくは清草押るるむらむる

藤原重家卿 新拾遺集

むつたのうきくたのたのふくむつらる時もあるやの形

藤原長方卿 家集

むつたのうきくたのたのふくむつらる時もあるやの形

後鳥羽院御製 老若平首秋令

此の時の旅のやぶのよきと思ふよりけり

同 正治二年百首

結の雲の雪の庭を冬枯くあゝこれ海をむさうけ

如願法師 夫木集

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

土御門院御製 後古今集

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

同 御集

春の時のやぶのよきと思ふよりけり

鴨長明 百首

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

藤原有家郷 夫木集

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

藤原定家郷 建仁五十首

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

同 新後拾遺集

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

同 愚草

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

同

此の時のやぶのよきと思ふよりけり

同

武彦時之弟兼光のあはれなきとあるる月日とあるるおら

同 藤川百首

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

同 丈夫集

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

藤原家隆卿 建保名所百首

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

同 續後拾遺集

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

同 新拾遺集

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

同 玉吟集

武彦時之弟兼光のあはれなきとあるる月日とあるるおら

同 丈夫集

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

同

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

同

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

藤原雅経卿 千五百番歌合

此のころいふたふあふまふ此のころいふたふあふまふ

同 家集

くも又秋のうらををたんとくあふりくはむさくはら

藤原経家卿 正治二年百首

此れゆりやんをて武彦野の葦を色くあつたれより

禪性法師 夫本集

その多ににらぬ草をむすしにむししに味つる葦くな

寂蓮法師 家集

しう一穂のまを六神の分位ぬまれまけまき秋をまあ次

同 夫本集

まぬくすくすのぬ武彦野の神をくまきよまのまを死

順徳院御製 夫本集

しう一穂をらぬらへはぬらぬ秋のあつたあつた雪の樹を

同

まらう一野れ秋のうらを秋風をまのまのまのまのまの

同

まらうのうらをくすくすのまのまのまのまのまの

同

まらうのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

同 建保名所百首

みらうのまのまのまのまのまのまのまのまのまの

行意僧正 建保名所百首

武彦野の草をみらうのまのまのまのまのまのまの

藤原家衛卿

何事もぬき入神と移りきりゆりのあはれむさう一神の家

藤原俊成卿女

海よりおれそり神と出れ音をもみくなくさきむさう一神の家

同 家集

むさう神の家れゆりに写羅子春をむさう一のいふむさう

同

むさう神の家れゆりに秋風の雲よあたるひまのりそ

順徳院女房建保名所百首

縁よりさきむさう一のあきも好ゆりつらむさう神の家

兵衛内侍

思ひやるむさう神の家れむさう一れもあつらひせんむさう神の家

藤原忠定朝臣

月とあつらむさう神の家れむさう一れもあつらむさう神の家

藤原知家卿

むさう神の家れむさう神の家れむさう一れもあつらむさう神の家

同 續古今集

武藏野入り来迎くさつらむさう一れもあつらむさう神の家

同 續拾遺集

冬の月れゆりむさう神の家れむさう一れもあつらむさう神の家

藤原範宗卿 建保名所百首

むさう一れむさうのまうむさう一れもあつらむさう神の家

藤原行能卿

此は月ひかりの尾を上げ去る乃道

藤原康光

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

藤原光経卿 家集

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

前園白 藤原道隆公 新初撰集

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

鷹司院 長子 新千載集

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

洞院権政 藤原教實公 家集

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

久我太政大臣 源通光公 新古今集

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

源通方卿 續古今集

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

藤原為家卿 千首

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

同

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

同 夫木集

此は月ひかりの暮れ去りて昨日の夕やも藤のつら

同

武藏守也...の...の...の...の...の...

同

武藏守也...の...の...の...の...の...

後醍醐院御製 新拾遺集

武藏守也...の...の...の...の...の...

監命婦 續後撰集

武藏守也...の...の...の...の...の...

藤原頼氏卿

武藏守也...の...の...の...の...の...

後鳥羽院下野 續古今集

武藏守也...の...の...の...の...の...

後九條内大臣 藤原基家公
丈夫集

武藏守也...の...の...の...の...の...

藤原時朝

武藏守也...の...の...の...の...の...

藤原為定卿 新撰古今集

武藏守也...の...の...の...の...の...

土御門院小宰相 丈夫集

武藏守也...の...の...の...の...の...

最信法印

武藏守也...の...の...の...の...の...

山階入道左大臣 藤原實雄公
秋枕名寄

郭公の交ゆふの野の秋波がゆふのまじりてゆく

藤原經朝卿 新後拾遺集

夕燈とよき里のまじりてゆく

安嘉門院四條 風雅集

むさしゆのふゆのまじりてゆく

藤原為理卿 新後拾遺集

草枕のゆふのまじりてゆく

能海法師 玉葉集

秋のまじりてゆく

藤原為實卿 文庫集

武蔵のまじりてゆく

同

花のまじりてゆく

藤原長秀 新後拾遺集

ゆふのまじりてゆく

久明親王 續千載集

ゆふのまじりてゆく

讀人志く候

ゆふのまじりてゆく

源頼康 新後拾遺集

草枕のまじりてゆく

藤原定資卿 新千載集

ゆきく千かきつそ初ぬしうゆわぬり事も袖乃ゆいふ

等持院贈左大臣 源尊氏公
新後拾遺集

東海いよふあう武花野れとあきよ宗成行やまきふん

源知行 新千載集

ゆきゆの千あふ遠く山の端いゆそも見えぬしうゆ系

藤原雅家

果知ぬ身のあふひとむさのを分迷やまぬる袖乃

頼阿法師 尊唐集

ゆきゆ月を照つよあけひの雪や草花枕むしとん

同

ゆきゆゆわねのまれとあふれ秋いふことあまのりなりきれ

同 續尊唐集

ゆきゆゆまの枯ゆい雲のきいさる草花ゆりり成らん

同 貞治五年園田家秋合

ゆきゆ世をくさく弱のいゆりふ紫乃意よゆりあ

宗久法師 新後拾遺集

ゆきゆ世をくさくさあふ日教よふふ二の福さぬゆゆゆ

同 都の侍宅

ゆきゆゆいのみあゆむあふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

藤原行春 新拾遺集

ゆきゆと花のふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

讀人志々次新後拾遺集

ひさしをたゆみく夕立乃雲よ阿まねるむさう一乃く京

同 友本集

武元時のもりのほそりる世世此處乃ゆらるといひあひ

右大臣 藤原通平公
玉多集

旅人のゆくさうよゆきゆく乃あまこゆるむさう一時の家

菅原長綱卿 新後拾遺集

月うけも露のふらりや露くん草のよとけき武元の時

讀人志々次 風雅集

秋風の吹とゆきぬるむさう一野のよとけき武元の時

源頼豊 新後拾遺集

きよなるそらとけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

讀人志々次

むさう一はなきよの果あけりてまよゆらむさう一も此れ枕を

源持資 慕京集

武元時や一ま生をよあまよふよのまを根よこのころん

同

ゆらぬよ別まてくよらひむさう一ゆらぬよけき武元の時

竟惠法師 北國紀り

むさう一はむ何のまよらむ種とてみらうた雲のり来乃を

同

朝月の子そらとけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

道興准后 回國雜記

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

同

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

同

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

同

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

同

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

同

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

同

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

平氏康 氏康行

同
あるは船道六神よりしんきんを草むすのふりての系

右無郡可屬

都筑郡

名寄松葉ノ我ノ歌林ノ山城經基郡武部ノ同名あり
ト又松葉ノ經基山城名所抄類字ノ六載セシト

延喜式ノ武藏國都筑

和名抄ノ武藏國都筑短々

又云都筑郡餘戶店屋驛家立野乃多知針坂罰佐高

幡波多加幡屋波多乃也

吾妻鏡ノ都筑平太文治元年

又云都筑右衛門尉同左近將監嘉禎四年

又云都筑右衛門建長二年

又云都筑九郎建長四年

江戸砂子ノ經基郡櫛樹ノ並都也ハ非ナリ

郡名考ノ云正徳二年官よりきりしり於筑ノ用ナリ

武藏志料ノ經基經基トモ書リ

按云々ハ郡ハ筑郡東北ハ櫛樹郡ニ接シ西ハ多摩

郡ニ接シ東南ハ良波郡ニ接シ南ハ相模國高

座郡ニ接シ事ノ内ハ救町ヲトシ今存スル郡

名ハ百八榎下麻生三石庄各所園小机根古倉三宗

領名ハ神奈川一所ノ七十七村ト云

大中臣能宣朝臣夫木集

此ノ地ハ筑ノ郡ニ接スル所ナリ

都筑原

名寄松葉に載と名寄之管本系又継系又經喜系山
城名所抄類字に經喜系山城經喜郡新林系經喜山
山城武藏之同名あり原

夫本集之云はき之系相授又山城

藤原系之云はき之系あり

名寄方角抄之云継系の國

武藏地名考之云新筑系經喜共書り或ハ經喜郡
筑郡の内之て今ハ河井庄在り東海道程ヶ谷乃
驛より二二里あり西之南なる子の西に二股川之云
里あり畠山重忠之後の墓あり古ハ澤倉よりみ

ら之く此驛路也

武藏志料之云或書之筒城系之宮ハ山城國あり
按之より都筑郡二俣川村新田の内之山名本宿といハ
西の山上に今新驛あり之を呼ハ其地代也之郡筑
系といひ之のより傳之ハ畠山重忠合戦せ之を
本宿の農民七名傳り先祖は系代新之壘開せ之時
之中より古き邊を堀いて之を之とせんけり地形高
平あり之水利よかられハ之ハ畠山を於くあり之
あり之あり之相授國言在郡鶴岡系
之と七里あり之つきて之と云之ゆつれ今此系
跡之系と稱する之地僅ハ東海之河南山四町あり

るまゝの西戎さしてむく此都筑の系とすのいひくあ
らんしうの本都の内組掾のいへる西戎とて都
筑系ありて一西戎とて非く

藤原行家 續古今集

長月乃都筑の系此秋葉のいへる西戎のいへる

顯昭法橋 新千載集

せうしうの系ゆりのいへる西戎のいへる西戎のいへる

藤原家隆卿 支本集

たう里にけきの系此たう里のいへる西戎のいへる

都筑岡

名寄松葉の載と秋林の綴と里山城武系は同名
あり岡名不抄類字の六載せと

按とて都筑系もよのいへる原の役の如くしと
さしきよのいへる西戎とて本都の山城低して
悉くともと稱してあるをよ

藤原光俊 綱目 支本集

いよせんけきの岡のいへる西戎のいへる西戎のいへる

都筑里

名寄松葉の載と類字の綴と里山城綴と都筑林
の綴と里山城武系は同名あり名寄抄の六載せと

按さるゝ和名抄都筑郡のりふ餘戸唐屋敷並立飛
針^{サシ}塙^{サシ}字幡橋屋の地名ありと筑^{ツク}とひ^ヒの穴なく山
城^{シロ}四^シ盤^シ在^シ於^リのりふ六^ム盤^シ在^リの地名ありと古歌は
きの里とよあり六^ム山城のうらなるきを志れと徳書
の記は志るひ志るくくは載或人の記は市^チの山
とる六^ム園^ノ開^キ壑^ノせぬ^ルを^ル東^ノ村^ノありとる六^ム里^ノ
といふ一^トありんとこれま^ニ深^クあり

藤原為世卿 新後拾遺集

屋^ノそ^ノ又^ハ信^ノ基^ノの里^ニに^カき^クく^ルき^クも^ルぬ^ル文^ニ立^ル此^ノ文

二股川

名寄松葉山載と名寄抄類字類林並に載せし

藤原為世卿 二俣川武州

吾妻鏡よ云元久二年乙丑三月廿二日畠山次郎重忠
叅上之由風聞之間於路次可誅之由有其沙汰相州
已下被進發軍兵悉從之云云前後軍兵如雲霞兮列
山滿野午剋著於武藏國二俣川相逢于重忠

北條九代記よ云重忠ハ別心なきよ一^ハ申^ル申^ルかんとて
孫^ハ念^ハよ^ル来^ルと^ハ聞^クえ^ル一^ハハ^ハ相^ノ模^ル志^ス義^時氏^ノ大^ノ將^トと^ハて
教^ヲ方^ヲ跡^ヲを^ハ卒^シて^ハ武^州二^俣川^ノよ^ハ出^向と^ハる^ルと^ハ後^ノよ
畠^山次^郎重^忠二^股川^ノよ^ハ行^クと^ハる^ルよ^ハ此^田を^以て^鶴
峯^ノ林^爲と^陣と^り云云

山田系北條の段帳に云廿一貫九百八十文小机二股川
岩本石負

武藏地名考に云都筑系云云此亦二股川と云里河り
那波の系
の下の解

武藏國村付に云都筑郡神奈川領二俣川村京二又川村
按ずると二俣川今八村名とありて村より川は名づける
やうに少ゆれとさすもあはれ〜村は二川相合する所
ま六川の名より村は負つてせざるなり〜戦後よみ集村
といふありそのあつりの山中より小流を助とせりて
此村内より吾系の川を流ま合する村の名はあはれ
よ〜云傳ふと田口親輔といひて二股川の一流八村中

小名膳部村といふ所の山中より發し〜その一流八流を本郡
川井村より發し〜とりにて流を又とせりて八向根村より
出る一流も合し〜橘樹郡保生谷驛のりより古橋といふ所に
流まて海よりの北條九代記に相接ち義時教万騎を率て
二股川よ出向ふと六郡筑系に下りてり万騎原の地をん
き息勢の客の持原に降るとは今二股川の東よ
り鶴方峯村をけりけりて島山氏主従の墓とて
六堆あり土人古の塚といふ又二股川村のうらよ隈の
測原風の測半の測持を測とといふ各の各の事と
事と土民ハといふと名所よありてこれか〜と云りて

藤原信實朝臣 現存六帖

志のりくわにやうくもあはれはるゝりやまのりくわにやうくわはるゝり

立野

名正抄類字名寄松葉並に載と名正抄小右和乎群
那同名ありと類縁しむる載せしと

後撰集よ云兼頼朝臣左近少将の侍りける時武彦
乃如馬むくよ中より立野よとるうにさるるりやうて
よとるに同じくされ少将よてむくよ中よりくお飯より
海身とくくくくひ知りとくりたる

倭名類聚抄よ云都筑郡立野多知

拾芥抄よ云立野姓尸録脚朝臣之下

又云石川由比立野小野秩父已上武蔵名牧

又云八月廿日牽武蔵小野御馬廿五日牽武蔵立野馬

武蔵野地名考よ云立野秩父郡の内池又都筑郡よも
うくわにきふあまの國疑のこ

武蔵志料よ云今奥ふく立野のまきく都筑郡在郷名
之和名抄の郷名ふも都筑郡と立野はあて多知乃と
訓きくりまご拾芥抄ゆも馬牧武蔵國に五戸有て石川
由井立野小野秩父も有紙にれは是のまきく都筑郡
ゆくと秩父郡の牧は別よあつると思ふ

武蔵源路よ云立野多磨郡立国原

武野遊草よ云北野村入同いよ云武野のうらに立

同

とての三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

曾祢好忠 家集

みららば雲田の山は秋きうれ三神の神をひくまじり

藤原忠房朝臣 後撰集

秋の多ら神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

藤原俊成卿 文永集

夕暮れ三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

冷泉太政大臣藤原公相公

旅人の三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

野宮左大臣 源公継公

きりかたの三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

正三位李経卿

なるとと三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

藤原家隆卿 玉吟集

ゆくはの三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

如覺法師 文永集

小ねの三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

藤原信實朝臣 新勅撰集

目次へての秋風とてやまのまゝにわたりておのり

源通平卿 歌枕名寄

暮るる三神の神をひく物とてやまのまゝにわたりておのり

公朝僧正 夫本集

小男藤井三郎のふれり〜紅葉をうらぐまで出陣のふ
花園院所製 後後拾遺集

今も身の上よふるはる秋落れらの弱くさるる

入道前太政大臣 藤原公實公
後千載集

花とて此のうらむ秋きりれらるるまよ男藤井かく

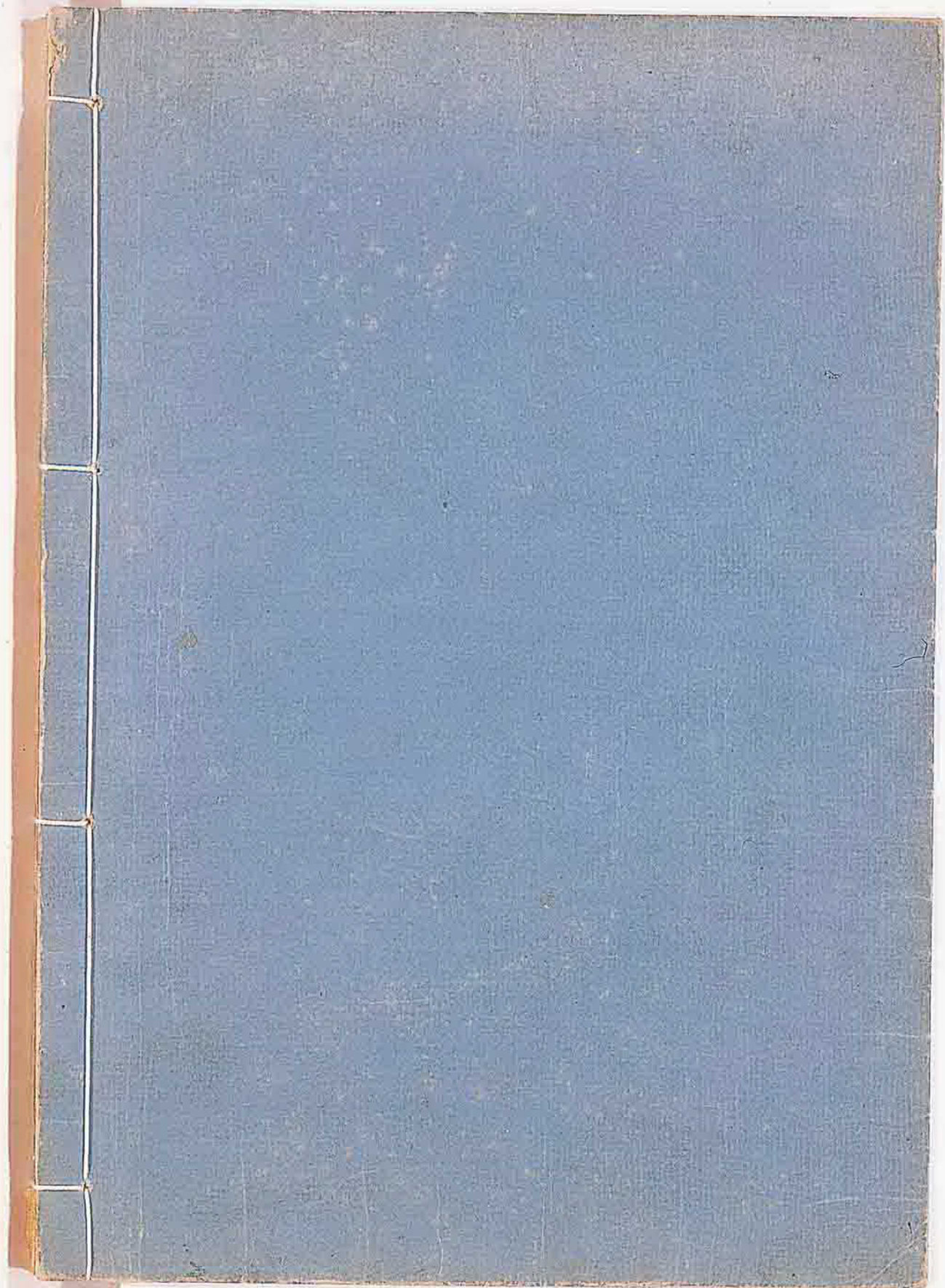
頼阿法師 草庵集

今も秋を〜花の雨影よ〜門社のふれまよ乃下草

源有重 文本集

はき〜われきらむれき草のむらうらむりてを
うらむる

右都筑郡



武藏名所考

夏

L290.3

マ

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

武藏名所考卷二



玉河

梶野陳人編



名所抄玉川山城攝津近江武藏陸奥紀伊久松遠
集之玉川子山久河布子山子歌を武藏之載之類字
名寄松葉歌林並凡載之

萬葉集之云多麻河泊

延喜式之云武藏國多麻

和名類聚抄之云武藏國多麻郡婆

風土記之云多摩郡或玉

又云多摩川出諸鱗及鷓鴣等亦里人作調布納内蔵寮
藤塩草云云玉河外花さける河あり是不限名所於
吾妻境云云可被懸上多磨河水 詳武蔵野紀

神明境云云延文三年九月十九日新田兵衛佐義興武州
丹波川船中ニテ自害

諸國物語云云あるの女と知りさう表れ障子細く明
多夕日さくさく影まをゆく津さく河さぬ玉川のさう
と細布さくさく近づく葦の用意とや單ある物と縁より
類字名所補翼抄云袖中抄と兼葦舟玉川と云く注
是ハ武蔵國之児玉郷といふ所より流さ出さ玉川を玉川ハ
いふかり彼川とて布とけくは之玉川の里其外の花も流り

武蔵野二ノ壺

と云云然れハ顯昭此相換り舟其之金糸集千載集云好
の花よき玉川の里ハ兼葦とまつりさくはと流ると
同所と名をくれり和名と武蔵之児玉郡ありこれハ是
も多摩郡より出流川也彼郡と云國府ありと俗に
はた玉川といふ和名も是太婆と流これハ昔より俗に
いふと同しと

梅さうふ袖中抄と武蔵國之児玉郷といふより流さ
出さ玉川といふ所ハ流りなり児玉郡名にして
上野國と接と多摩郡と敷郡と居玉川と
於て關繫とありの外

紫一本云玉川矢野の渡より六々の橋乃を流る川と

室前一説あり、法谷祥雲寺の末寺は西よりその地
より古き洞の筒と塔出りけり、と年号なきの舊一説
多波川と有と祥雲寺の住持中々古き祥雲寺に納め
置き、之を中々へ、と住持中々古き、と日多の住持あり
一を中々うちり、と中々へ

楊とふ祥雲寺の末寺といひ、ハ多摩郡多摩村常
光寺の事あり、洞の筒を今祥雲寺中景徳
院と蔵と銘、敬白僧智賢南閻浮提日本國武
蔵國多波郡定光寺兵大施主上生成恒少施主藤
原氏工藤原守道仁安二年歲次丁亥二月廿一日
庚寅とあり、定と常と國音同、これハ洞の頭

より、楊、たるなる、

本朝俗誌志、武蔵國多摩郡の玉川ハ大河より流
の末六郷の邊あり、此川の氷ハ大指の腹厚と云はれ、丸く
氷り、河岸の枯草かれ葉、とら河ひ、玉の聯け、あ
やく只水精の珠敷と乱き、と似たり、此川の氷、河、氷
かく氷、此故、玉川の名あり、をといへり

山岡明阿云、今考らば氷の玉乃、かくあ、とて、名付、ハ
後の俗のいひ、出、と、之流水の氷、い、い、い、の、
さ、た、め、つ、と、き、と、た、あ、ハ、多、摩、郡、を、経、て、流、り、の
あ、ら、故、と、あ、り、い、ハ、入、間、川、も、ま、ま、同、一、意、也

武蔵野地名考、云、西の方甲信二州の山甲より武州

多波山の山谷と流き出く東の方播磨郡の初回の浦
の方と海にゆき凡四百里矢口の海と比河のよまなり
按とる多磨川の源六甲信二別の中一といふ事
甲斐とては今丹波山といふ詳と後と何とて
甲斐とては今丹波山といふ詳と後と何とて

甲斐名勝志といふ丹波山武蔵國多磨川の源なり倭名物
と武蔵の多磨郡と大婁と注と此地を往古日本武尊
當國へ入る路也今大菩薩通るといふ

按とるたつ川を源と甲斐國都賀郡丹波山と後と
ゆきと名代得といふ郡名を其直帶さる水とては
水名を温觸乃山と取らるる一為る事集と多麻延武

も多麻和名抄とて多磨の作と音とより字と填せ
まてとてと意義あり丹波もまといふ事と音代
あく字の異なるを流しとてはさて川の源流ハ彼郡丹波
山村の山中より出ると本流とて同郡丹波村乃山中より
出る二流とて丹波山村と尾村二村の間と過ぎ尾屋
村法瀬村の間とて高尾村小菅村の奥より出る小菅川
とて一流とて會一鴨沢村の上よりて尾屋村の奥より
出る尾屋川とて一流とて會一又鴨沢村とて小菅
村井持村の間より出る一流とて會一は川の上白津村とて井持村
は尾村の間より出る一流とて會一
武蔵小入りて六山河内村の事とて小菅ありあれ出る小菅川とて
一流とて會一尾村中山村の間より出る水根澤川とて

一流を合ししを氷川村めく山の方秋友郡より流れ出る
 日奈川と云一流を合し又棚沢村と小丹波村の所を少乃方
 峯村より流れ出る一流を合し又丹之原村龍壽寺の間
 まで南の方御嶽山より出る一流を合し又川井村沢
 井村の間をく少乃方大丹波村より出る大丹波川と云一
 流を合し又澤井村二又尾村の間をく少の方より流る
 出る平溝川と合しそれより青梅村の南を流る河村
 の東南を花村二宮村の所よりく西の方平井村の奥より
 出る一流大久野川と云を合し佐目高月二村の間
 こそく秋川に合し秋川の上二流あり山の一流はいまの源を弾
 かせと南の一流は山のきとをいふなり此は
 又東南を合するを数里石田村と一宮村との間を

て大和国川と合し大和国川の上二流あり山の一流は淡路
 まで南の一流は約志野小井より
 流れ出る中此南をくそれより数里北なる南より
 合する細流ありを合し多摩郡中島村と櫛樹
 郡登戸村の間をく三笠川と合し三笠川の源は
 於龍郡墨川
 村よりかく諸水乃合流するを大和とあるを
 さらなり今郡下水利乃源とありくを水を作
 くもの億兆に至り実と南側の名水といふを登戸より
 下南の地方福新園といひり数里よりを櫛樹
 郡に属し少の方をく多摩郡に属し於龍郡に属
 する地方は下野毛村より羽田村といひり多摩郡に属
 多摩郡の名此川より出たりしをむらさきといふ也

讀人志く次 萬葉集

多麻河のさきほたるのうさくら

同 拾遺集

玉河のさきほたるのうさくら

伊勢六補 支本集

玉河のさきほたるのうさくら

藤原家隆卿 建保名所百首

玉河のさきほたるのうさくら

玉河里

名寄ふ載と名所抄 類字松葉歌林載せと名寄ふ

先達寄枕玉河里者奥州在之其寄悉載彼和年但
近代寄多尚國玉河里詠之名所抄の六攝津と載せ
陸奥國名もと流と

建保名所百首玉河里國名を流せと志くれと毛平の
より此寄の六本國の事 昭和の

名所方角抄の云多摩河里

按と云に今玉川郷の比企郡とありと大橋腰越の軍
沢妻原玉川根等々の教村流とととととた流のり
ささしとよめ流の多摩郡なる人々今大丹波山丹
波といふ二村あり丹と多と通へばと摩と音通と
まは是とむくの玉河乃里なるんれ近き武蔵

國調紺布九十端縹布五十端黃布四十端自餘輸絶
布庸輸布といふも此れなりとせしむる也

藤原定家郷 建保名部百首

多作やさしん垣根乃船森成法くねきとらぬ玉河は里

前關白 藤原道家公
新勅撰集

くふより八波くかりとく甚なむとや垣根乃玉川は里

向岡

名不抄類字名寄 松葉歌林並く我と名取抄の源ふ

一説に河内

萬葉集に云向岡

萬葉集

風土記に云多摩郡北限向岡

又云豊島郡北限向岡

按とらふに向の字恐くも恐の字此誤あるん説恐

岡の字に詳あり

藤原集に云むつひの里

名所方角抄に云武蔵向岡

名所補翼抄に云新勅撰十九は小町ら武蔵野の向岡

とよらふ外も名取にあらん

武蔵野地名考に云玉川の流と少く帯く西は小山岡乃

関よりけりまらなる末長の里と終まり名の長程六里河

まりむらむら南ふむらり多摩郡橘樹郡のうらむらり

江戸砂子の云向の岡を松平出雲守及梯系武部大捕及
扇邊を云む一の岡を今の上奥州への街にありそ
の道より他と處を一つむらたるゆゝ名をとり取り
江戸志云向岡梯系家扇邊の辺に云く江戸砂子に山町の
身引く此交とされともむひの岡を云く武部種地名
考とるゆ此交とる阿とりは

四神地名を云く享祿三年上杉朝興玉川を云く阿とり
陣一山像氏康向岡の小澤の系に屯一一軍府中
と合戦一上杉方敗軍せ一軍軍書に記一者が阿と
里人一事跡を尋一た妻一一部は人が一まとりてや
それより山ののる者知ぬと云ふもむと又いふ向と息と

いふ名を玉川より南に在りとのいふく實証はなし
次多磨郡乃名和なり

按とる小園東治乱記小享祿三年上杉修理大夫朝
無き河越の城にありなる小回原の氏綱氏退治して
先年に馳と雲一とて云く武州府中に一つ出立し
てなると聞えたれハ氏綱云子息新九郎氏康を押
向らる云同六月十二日上杉の陣へ押寄こり斬るを
武部府中玉川の端小澤系と云交へ押寄と
あれと向らるとりのりとなると云いふ書に
阿とりや

按とる小園風之記北限向岡と阿とり玉川より南にあり

とて六方位ありては僧亮盛寧巡禮記の序に狭山とて
向國とせること（注）統撰山の
りよあり 風土記の方位より多し且多摩入
野の中圓の一堆とありて今もこれをまきと都界とせり
これ八向の國八所ら狭山乃一名と也月ゆされと志けり
四き説く後ひく別とされ紙載と

榎本人麻呂卿 弟集

出くまぬむらた島の志けりとされり花のなほひき

小野小町 家集

むらた島の向の志けりたれは福成たりともありんたとふ

隆源法師 歌林名考

夕自す向の景乃郭云雲のとてそれなりとてふけ

後鳥羽院御製 御集

夕自す向の景乃郭云雲のとてそれなりとてふけ

同

松とまればむらた島の志けりたれは福成たりともありんたとふ

藤原定家卿 愚草

夕自す向の景乃郭云雲のとてそれなりとてふけ

同

夕自す向の景乃郭云雲のとてそれなりとてふけ

藤原家隆卿 玉吟集

夕自す向の景乃郭云雲のとてそれなりとてふけ

藤原知家卿 續古今集

秋のしづかにもささるる月をみれば
藤原為家卿 十首

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

夕陽のしづかにもささるる月をみれば
同 歌林抄

藤原光俊朝臣 文友集

源邦長朝臣 新後撰集

藤原為実 文友集

よみ人 不明

鳥のしづかにもささるる月をみれば

鳥のしづかにもささるる月をみれば

狭山

類字名寄松葉歌林並不裁す類字に況河内名寄抄載せし

山國紀行の云々を述べ其間の一節ありて武野遊
 と名付らる野遊のりり名は國を一様山背野の衆
 を名付らるるゆふむのりり名は國を一様山背野の衆
 名山方角抄の云々秩父山の嶽の西のりり名は國を一様山背野の衆
 と云々ありて武野遊のりり名は國を一様山背野の衆

武野遊野地名考の云々多摩郡箱根崎の云々ありて
 この山の東に武野遊のりり名は國を一様山背野の衆
 といふ事ありて武野遊のりり名は國を一様山背野の衆
 様山記世音順礼記序の云々武野遊野の中ありて
 云々ありて武野遊のりり名は國を一様山背野の衆
 記に載る武野遊のりり名は國を一様山背野の衆

丘とむらゆま古くはくきくありて武野遊野の中ありて

武野遊草の云々様山の嶽を云々の様山とて武野遊野の中ありて
 ありて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 より挾と書るも武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて

様山とて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 の様山とて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 いふ事ありて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 いふ事ありて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて
 武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて武野遊野の中ありて

隸と山口領も多摩入間二郡に繋り多摩より属する
もの凡十八村入間より属するもの二十八村を狭山の麓に
散在の山口より狭山の口より北より南にあり
こゝに向國を全くは狭山あり一余嘗て山口領新
堀村の觀音堂よりありと昔より山徑は急して狭山を
往るは嶺根勝しく一折しも映山紅にせむ
嗚らきりや丹やまゆもすまそと一はし
ゆのいゆれくとい真あり

大江匡房卿 新後拾遺集

やもたれいふくみくさの昔くく思とてはと 秋風を吹
藤原顯季卿 千載集

五月園の障子の火を雲の絶りのりくくそ見は

後鳥羽院御製 續古今集

秋風いふくみくさの昔くく思とてはと

狭山池 一名箱池

名寄狭山の下に池を附一或河内と載と松平の第
池と載せ又狭山の下の池と注と類字秋林の池と
揚々はその秋は狭山の下に載るは名寄抄載せと
八雲抄抄くみくさの池哉

交本集くみくさの池河内又丹後或肥後

山園紀行くみくさの池をたかひりやあり池あり

詳く上は
見せたり

江戸砂子云俗溜池と号すの狭山の池と老案に傳ふ
此説をかくしと云熊谷宿より石原宿の右の方を程定
りしより太田良言湯射玉井十郎の齋治ありけ右の方山
のたぬ山に池あり田丈ハ龍尾の元山といふ美談の親世音ありカ
士門の額ニ沙山の二字ありは遠く同く池ニ西あり一西
沙山のかしらにありと云龍生を成まり一西を嶺山村藩派
龍尾村郡の田の中と深に池あり宗祇方角抄に程父
根山荒川沙山といふ名ありと記せし右の西と云
るをこれと考ふる溜池と狭山の池といふも是つゝまた説あり
武蔵野地名考云云と云の池ありとあり二十町とありこの
池と云云傳に云と
思ふなり

又云久米川と云細き流れありと云ぬと云のと云教して六
七里と云く入間川のまゝに合流と

武蔵野遊草云云程根を流るといふと云る此池と程と云といふ
田池ありと云る狭山の池といふ草葉の名ありといふこの池
乃ち大さ凡十町四方もあると一四方皆山林とて池の方ハ武
甲の遠山雲は程々東北の國ハ則狭山西水の極りなり南
ハ林沼満く程葉の大畧ありかくまて奇観ある池今も
こゝとく芝村と云る一池の形はとほとほに存せり芝村
北東のこゝよりと云三十間ありの池ありと云に跡あり
中洲と云天女祠あり此池の淵と云る来由は土人の國に
昔年此村に次郎と云流といふ土民とありおとす一夏の

頃矣熱うたえうぬ此池と浴せし時小蛇来りてかみ此
の頸とすまふとありう移くかこましく蛇とさうすまふ
喰きりてその幸きりて岸よりぬえりうらたか乃
半断よせし蛇とさふき蝮と變て死しるよし次
才と池あり洞湯と今ちこのこくなれりるると草葉
も今此池よりそく此狭山のほき宅部村小沢といふ
池と多し又山とある道の肉垣といふ村乃四池と
ありし

按じると狭山池一名箱池といふ箱根の傍に在ゆと
ありし松葉集別と箱池と掲ぐる名の変りゆえ
しやとの實に池かろき疑ふなりしその地形は石氏の
武野遊草にこれ記しあり余これ遊したる地は年々
畑と記しきしる所ゆきと牧羊の後を今此池の傍に
しとあるところありぬやかりあり

よき人志し古今六帖

慈母とておぼゆる池のみつとてひらとせしれぬおぼゆる

藤原仲實朝臣 交本集

春ふつとおぼゆる池たぬおぼゆるのころけもなかくかりのた

藤原定家卿 愚草

凍れとておぼゆる池のこみりも春のあたる待り

藤原季能卿 千五百番歌合

媽とておぼゆる池のみりりかたのた

藤原隆祐朝臣 夫木集

とくさふたの池の傍に かげのひまわりまはる御のいと

ト部兼直宿禰 夫木集

あやふふとふの池のまををこれみたりれれつれんむく

藤原光俊朝臣

燈籠のまをの池のまをこれみたりれれつれんむく

亮惠法師 北國紀行

氷のけの池の傍に 氷のけの池の傍に

和經法師 夫木集

冬ふたの池の傍に 氷のけの池の傍に

小山田關

松葉の裁と名取抄類字名寄歌林載せん

夫木集と云ふはこの関武彦

吾妻鏡と云ふ小山田三郎重成 文治五年

又云小山田四郎小山田五郎 文治六年

畠山系圖と云ふ小山田別當有重小山田五郎行平 平一作重

太平記と云ふ小山田太郎高家

武花野地名考と云ふ関戸小山田此関とよまはるけしめあは

屋と一里里の池と云ふと云ふ小山田の庄と云ふ関戸乃

うしろの池と云ふ関のけしめあはるけしめあはるけしめあは

まはるけしめあはるけしめあはるけしめあはるけしめあは

わつゝ分隊は軍やぶれしき英雄の人々をわくはくして
こころをわくはくし、冥戸の府中より二十町より南
にわくはく河の向のきくまらる里なり、津戸三郎四郎も
けりしり石田といふもりのこころ

四神地名録に云、冥戸村といふも多摩郡のうらわく
玉川の南に在古名をくして古く小山田の國と稱し、國の
古名といふ

余嘗てく舊記に依り、冥戸村とあり、小山田の國址を採
りしに、夫人の好古の癖ありと、相沢休那源氏物語と稱す、
建しして五虎と号す
久々くわたり、好古の癖ありと、ゆゑにわかれしを
國と是まき、知りて今村中ふ古城址ありは是とて

國址と附會せしむるんといひ、りゆめ、國戸日野の古名

をく屬し、小山田庄の外るれは是とて、小山田國とい
ひ、難し、吾妻鏡、元久二年乙丑三月廿二日の下、山
次郎重忠、叅上之由、風聞之間、路次可誅之由、有其沙汰
相州以下、被進發軍兵、悉以從之、云云、關戸大將軍式部
丞時房、和田左衛門尉義盛とのせ、太平記、新田義貞起
義兵條、新田の人々、旗を奉り、上野國小起り、武花國
へ打越り、國々の將軍、八定、藤倉、そへ、ハ、も、待給す、
國戸、入、同、河、の、邊、ふ、合、合、て、そ、防、き、強、ん、と、ん、云、云、又、藤
倉、合、戰、の、條、藤、倉、中、井、人、の、昨、日、一、昨、日、ま、て、も、分、隊
國、戸、の、合、戰、も、く、勝、方、打、負、ぬ、と、載、し、け、二、書、し、も、冥、戸

どのく小山田の園と稱せしるものも其の況や今も小山
 田在りまこと園戸はこれに屬せしめて吉富庄に屬せしむ
 ちるいぬ小山田園といひはは園戸にそありし事
 必せり余又おしらく今小山田庄に屬せしもの十村大森村
 上小山田村中津田村並に柳蓮光寺村蓮光寺新田柳下
 小山田村金井村能谷村山崎村以上各村金森村本所これハ
 小山田園ありし必上下小山田村の内ありしとせしむ
 是れは福祿く園址探せしむ二村乃内園ありしとせしむ
 傳はせしむよしくたく下小山田村とあり大泉寺といふ禪寺
 の地小山田太郎高家の城跡ありと傳ふの事なり河合
 某の園師村抄ありしに小山田園を園師村のうら柳本庄に屬す下
小山田村に隣り

大森院といふは修驗者の先墓の所なる所を記あり中古
 藤園法郎某住居一園のりをもつしとせしむけるは藤園
 の園とも稱はし古き府中より相模園への樹をハ山形路
 町園師村本曾町と稱せしは園師と園ありしとせしむ
 といふり園とせしむ今園師村にハ庄名ありしとせしむ
 村多く小山田庄ありし古き此村をねりしとせしむあり
 しとせしむは園のありしといふもひさことせしむありし
 於後の考証材の事又小山田園といふは藤園と稱し
 なるんといふ説ハ田園雜記より附會せしむの事ハ
 しく藤園の下に辨しとせしむ

あつとく苗代ふふりてあつとく一はあつとく山田の国
よみ人

多麻郡苗代水くまらせとそらていふは山田の国

横山

名所抄名寄松葉並に載と名寄之武花多麻郡又
和泉と載と松葉ゆも又和泉と載せ又玉横山常陸と
載と数字歌林載せと

系集集と云與許夜麻 味助

又云多麻乃余許夜麻

拾穂抄に見安云武の横山名所之代 匝記と多麻

のよと山ちり一多麻郡とある山と名牙十四ふあふ
きのよと山へりともはあつとくこれ名とあつとくこれ名
國とあつとくあつとく入つとく八國名あつとくあつとくあつとく

八雲御抄と云と云と云武

又本集と云と云と云和泉或武花又常陸

藤原集と云と云と云と云山常陸

吾妻鏡と云横山太郎時兼 壽永元年

又云横山野三 文治元年

又云横山權守時廣 文治五年

又云横山三郎横山太郎 文治六年

又云横山馬允横山六郎同七郎同九郎 建曆三年

又云横山庄大膳大夫 建曆三年

武藏七黨系圖云横山黨 小野氏 横山大夫義孝武藏權

介始住武州横山

又云村山黨 平氏 横山五郎家光

武藏志料云云云山今青梅之横山村ありそのこと云

梅と云に青梅の多し横山村といふあり國圖の多く

青梅新町と横山町と云るをり青梅の東に村山

村ありのりこれらもや混へん

又云多摩のよと山多摩郡にあり地名なり横たをれ

園といふをまゝ郷名と古に降戸といふ多くと和録の

こと云りなすをいふを建を即いふを降戸ハ今也あり

班固の時割のまをり西中と改いふやあらん今もかく

いふ地名まゝいふをまゝく今も梅と横山村といふ有云

又日本紀安用と横澤ありその西もや

武花園郡村記云多摩郡横山町

按とるに横山と云るの詳あり今多摩郡に横山庄有

八王子の南にあたりこれに属するもの大谷村 武山郷 小官領 山

田村 総領 上柚木村下柚木村落合村 柚木領 中相系村下相

系村 松本領 散田村下を分形村大舟村松系村小比企村寺

田村小山村 柚木領 凡十四箇村ありまゝ此等の山もて

もあるや又八王子に横山村と云われと原彦輔いふこれ

り小宮領 涉山よりうたり村といふ八王子北元八五

子より移りてはと同時かぬハ古きものには河内
山より今横山といハ地名のまじり大石氏の信を神護寺
といハ城跡のある山下ありハまじり西に二里許りあり
其のれとも古歌によき横山といハ地をいふといハ
りも河内山といハ横山といハまじり西に二里許りあり
其後の考証まじり

漢人志ハ古事集

山名考証

宇遲郡黒女豊後郡上丁掠
隣郡荒虫之妻

あつた

藤原顯仲朝臣 堀川百首

明くはみそらの外にかとまじり

横野

名寄と載と又和泉上野とと載と同名有とと名所抄
類字松葉の上野類字松葉と又玉横野 和泉新拾遺集
徳人不却の
歌一首
と載す歌林載せとと

夫木集と云横野近江又上野或河内とと云とと
乃河内

日本紀と云安閑天皇元年閏十二月武蔵國造笠原直使
主與同族小杵相争國造云云謹爲國家奉置横渟橘花多
氷倉櫟四處

勝地吐懐編云横野堤類字名和泉系其れの横野乃堤

風をさく入地をさくふる等之仁徳紀云十三年冬十月

築横野堤延喜式云澁川郡横野神社延喜式より仁

徳紀と按とるよ横野堤澁川郡於難波宮にましく

これ八珠に河内攝津の國の供ありければせむひと堀江

をさくせむの合きくさく〜和泉の横野ふるまき

物と見えて事なり〜

又云横野類字上野紫井ねとよと此のつら董生と袖より

つらん色もし〜は奇と系葉第十にはこれ根とよ

横野の其れ根とよ若くははく嘗あつ是をとりて流れ

よりけ上りか〜の山羽のひの山佐保山とよ老る

奇に交りてゐるは横野も上りける澁川郡の村かして

物ほ〜そ上古の人へけぬ國へぬ西と云る意と云の歌お

りき中とるとに廣く物とよとるやうに此外に初と云徳と

けさ六はふは〜よ上野の名よめる奇にる〜と云

武蔵志料云は説こよれ八丈本抄其の奇は〜か按

津國澁川郡の横野をよめ奇感とそれをとり

てよめれと當國の奇とす〜は但〜武蔵志料と

は案と昔より讀あり〜これこれ等の奇もは案に

ひる〜は國の〜とらるめや

武蔵志料云横野ハ上古乃よ横山のり〜やあらん

又云八雲河抄字紙勅撰名系抄藤原家よ上野と有

又藤原系と和泉と有横野院ハ和泉と有今櫻木系
と後子多摩一ねとくハ武彦野の肉乃一名於たまの
横山と後りよと六和名抄と云々一横野あり一
又云又本抄玉回横野有河内之と物と云々如何
横野に横野と云々一詳あり今多摩郡と横根村
ありのとねと云々國音通と云ハ横根村と云ハ横野の
横野なるんともいふれと云々地と後と云々云々も分
かきは云々後の考と云々云々のと

藤原家隆卿 秋枕名寄

雲と云々本抄の本抄と云々いふき玉のよと時と云々いふれ始と云

漢人志と云々新拾遺集

終夜そのむり試みくとなり玉の横野の 秋乃月之け

頓阿法師 草庵集

此と云々おけらと云々白雲の玉の横野此秋のこの路

右多摩郡

荒蘭崎

名不抄類字名寄 松葉教林並と載と

名不抄集と云荒蘭乃崎

拾穂抄と云所かけの河と云の云云一云みさうの云々

名不抄の先荒蘭崎武彦也並云々も八雲抄と武彦也

一云みさう武彦横と郡所扱あり一

藻塩草と云荒菴崎武荒

田圃雜記と云芝の浦といふ所とあり久保の塩屋の烟
草とありひききく揚子ひききと云同きと云舟次りて云此
浦と云くわく井といふ所

小回原北條の限帳と云五拾三貫六郷内新井宿梶
原日向守

紫一本と云小川大森の巻乃波打きり紙ありの崎と云

江戸砂子と云荒菴崎鈴森の磯也

武蔵野地名考と云荒菴崎在る郡あり井宿不入斗
村といふの海邊と云未考

再校江戸砂子に云あり崎ハ今の小回原山あり

荒井宿村のうらといふ此山往還と云相州街道之宿場
なるなりといひなり

武蔵志料と云品川の南西に新井宿あり此所あり

江戸志と云荒菴宿鈴森の磯也

四神地名録と云荒菴宿古く此所海邊と云往來ハ概
雲寺といふ寺のうらなる岡を通りせしと云古名も荒菴
崎と稱せし當國の名称を定家郷の身有りとい
傳の拍子りなり歌船の判とありの崎と云り定家郷
の身付まを磯と崎と云りてよめる事ありといふ
是れ里人乃古き也付持ありてんを云書と有り
端也なり

北川一善云荒蘭崎崎玉郡笠原村の北にあり今新井村と云
按ずる不此況いふべしと暫く後考まをるべし

按ずる今此池上街道八景坂一名茶研坂より右のてらに
重寄といふ程利と隣に本末氏の跡ありうらうらの山
と本末山と移とむべし此官道もこの山の上よりて所謂荒
蘭崎是なりと今も土人のいひ傳ふさらば再校江戸砂子
に荒井端村といふもあなれハ磯の名の残り一ありてかく
てを獨りあらんのかきまよくわらふべき

源家長朝臣 後後撰集

志々波のあゝおれ崎のそおれ松かゝぬ色と人ぞつれ多に
藤原信實朝臣 千五百番歌合

志々波風あゝおの崎よなる波のうらもたあまの今を遠き

今出川院兵衛 支本集

志々波浪のうらおの崎れ波風と吹よせむねく鳴る多るうら

道興准后 田圃雜記

志々波のうらおの崎のうらあまの波とむらがる岸の松風

荒蘭磯

松葉の荒磯武蔵春雨抄といふ尚國威未勘といふ名雨抄
類字名寄歌林載せんと

支本集よまあゝおの磯武蔵

江戸康子に云荒磯松ハ冷森山よせに在池上の道助也

江戸ありまゝ荒磯の松後の森の磯の松瀬風よみてあふ
こゆりーろー

江戸名勝志に云麻子の昔荒磯松林森山よせに在池上の道
とらふとはいゆるこの松のり次流るれ名取志に松林の磯
に存と云記とよーとん

四神地名録に云磯別松と稱せし松の大樹今の熊野
権現の社迎くまうふ十年より一木より一枝こふ折れ
出ふより地頭よりきりく掘雲寺よあらる今句ははく
了くちの什物と云磯別松と稱しと名なき松を松別
須磨浦に在り同名あり此松もあらる事よ也此西ふ古ハ
蘭教多生せしゆ急あら蘭磯と稱せしよーといひし

松と云荒磯磯夫木集り載れれも後の世の書よら
荒磯の松とのと出より今の松林と名ふりり昔は海
中ふれハ磯といひていふとていひし木を山といひし
の磯別松の切株とて今も存せりさて寺のうらふ
寛文四年甲辰木原義永の建てし碑ありそれよも
荒磯崎之磯別松是ことりてまを磯と稱せしハ此
山の裾らる事必せり

藤原季能卿 千五百番歌合

松きほ浪あき舟の磯乃岩よ押る松まほにる袖のうらふ
裏と云顯昭判詞云荒磯崎とよらるふ奇よあま
付れハ何らるの磯も付らん磯と崎とあかす

よりの事なり〜と〜まう所や〜由り〜と〜

笠嶋

松素不載と名也抄類字名寄歌林載せと

美事不集と云笠嶋

仙貫抄よ笠嶋武藏

八雲所抄よ〜は武藏

交本集よ〜は武藏

紫一本よ〜は武藏〜は武藏
笠嶋一本よ〜は武藏〜は武藏

再校江戸砂子よ〜は武藏石の居沖あり〜は武藏

相の〜残り〜る寶永の大地震におきて〜り〜と〜をわその
り〜水沖の〜の〜り〜し〜一統と〜笠嶋の神社の居あり
〜の〜鈴森と〜笠嶋と〜一社と〜又〜笠嶋の社を〜り
〜といふ又〜の〜り〜一社当社の境内〜り
〜は〜
或書よ〜鈴森八幡の境内と池あり縁の池なりその中れ
る池は笠嶋と〜早と〜これ古歌〜り〜ありあり〜井〜の〜は〜と
〜るは是なり〜り〜り〜と〜地のは〜と〜せ〜り〜と〜思ふ
〜る〜地〜集〜と〜〜り〜り〜り〜り〜り〜

近藤孟郷云今鈴森の〜り〜り〜は〜り〜八幡の社
あるは〜り〜の〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜

仙よりあるもの崎の笠島と誦へるやうに

北川一善云は笠島を崎玉郡笠原村とあり崎玉村より一里餘東南村内と

吹上あり一町四方もある一慈母の神社あり是笠島也

按するに此説まゝ取らる

按するに荒蘭崎今の新井宿とれと笠島中と異なる
ついで於森八幡と社人のいひ傳へて延喜式に載せ居
磐井神社とをばむら海中の島とやありし近藤
益郷の説後へきと仙より

よき人志はあま集

善かひのつら井は崎のかうはとんはくや君り部と載らん

藤原為家卿 夫木集

秋の夜乃あるもの崎のかうはとんはくや君り部と載らん

右在左原郡

忍岡

名簿に載と或る河内と同名ありといふ名正抄よ忍岡
河内信実岡陸奥類字に河内一説武州と載せ陸林松
華とよ河内と載と

八雲海抄と云志の心の吾武翁

夫木集と云忍の乃と陸奥

藤原孝よ忍岡河内

小園紀行よ云忍の岡油井橋とていふ此説よ忍の

本條の毛いり

又云武彦時忠の末代さうい思の國と優遊一傳法應社
五條天神と申侍りくさうりか一柱の芽を燈侍り

田國雜記と云次の日淺草城と云く新羽梅とるし新羽ハ
那統那とありと云る

西よ押のしき侍とて名をいともなる中と思の國といふ

と松ふれもけるさうりかやと云く城と云く山名川と

いける西よまうりく

名所方角抄と云思國 向島の
りは裁

續無名抄と云思の國といふ所の東敷山寛永寺あり南
光坊慈眼大師の開基たり寛惠法布の紀行より二月
の末ついで武彦の志のいのもよ優遊をり彼所の誌ると

武條の天神と云いんや侍りと書り

江戸抄と云思の國東敷山の惣名と

再授江戸抄と云思の國古城といひり大永四年甲申

正月上杉朝貞の家老太田源六郎金吾源三郎五郎

て小田原に通一相國と定む北條氏綱一万五千餘兵

を率して武彦時忠の城と申しと云る城は朝興八千餘兵

よそふ川まきく押し出お殺しはあふうら負て引くと氏

綱續て城と申し一浩る相國と云る子に夜のうら河

越の城と云る氏綱翌日城と申し思の國の城と云る遠山

四郎左衛門と云る思の國の今の上野と云る又云

と一冊の思の國といひ思の國の首と云る思の國と云る

名をかねていつまう非なるん或人のいへくも一姓の出
城のこゝ上野の地こゝもあらんうお川へ押出ると又出戦
氏綱一軍もく首実檢せしとあるも赤坂よ今一木とのふ
西あり是も古き地名のよゝるれは函根もむよと申とあり

按とらん関東治乱記も大永四年上杉家老大目
源六回源三郎謀叛と起し一山田系最と訂合相圖を
定りしうを別時刻を移さし山條新九郎氏綱伊豆
相模の軍兵を引率しして江戸の城へ寄りの江戸乃
城主上杉修理大夫朝貞居あしし敵を信る武畧
善きし似たりとて品川へ打出乃ううく敵を信る
去極よ山田系の子孫と上杉は勢當我四郎と品

川の筋言繩の筋よそ録合せ云云上杉忽よ打負て
江戸の城と訂合云々朝貞終つころえう孫傳よ今れハ
城を閉く回國川越へそあひたる夜雨けしは氏綱
敵ハ子孫ありと見えゆそ追拂く討て板橋迄まで
勢を信るし一高杉兵隊追討しこそせしれたるそ後
城へ打ち入討たの首実檢ありし一木系は終先打
立云々江戸の城は幸山四郎右衛門と云ふらましく山田
系にゆとあれと武義野の城忠國の城の沙汰ありし
恒是形ありしるも何のまらるやおのよは是ハ江戸の城
との城避く武義野の城と作るた忍る國の城と
いふ處をも治乱記も江戸の城と作るううう

按るるに北國紀初回國雜記等之據に忠國の事云々
今の東叡山ありの地なるなり——但風土記に多摩郡
北限向國といひ又忠國郡北限向國とあるを忠國郡の
北限恐くは忠國のかきかきなりとあり——今忠國郡に二
郡の邊に荒川を流るる忠國より入るる——この里程を據
てて山にありて今此のくもあはれいとあり——これと上
州にありて松方尾久三河島のありて荒川の入りありて
大なる治なり——とありて二郡の邊に忠國といふなり——
又上州のうらうらと根岸といふ地のありてやう——荒川忠
國の根をなかり——此とすなり——

前齊宮河内 堀川百首

あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも

藤原範兼卿 夫木集

あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも

後惠法師 家集

あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも

藤原俊成卿 夫木集

あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも

賞實法師 新後撰集

あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも

藤原知家卿 現存古帖

あはれいふもあはれいふもあはれいふもあはれいふも

友原富家 名寄

人あひのまのいひの思ひかゝるまはれあまのまの神ありぬらん

後九條内大臣 友原基家云
交本集

よひのまのいひの思ひかゝる神ありぬらん誰の思ひの思ひかゝる

頼圓法師

よひのまのいひの思ひかゝるまはれあまのまの神ありぬらん

印宗法師

よひのまのいひの思ひかゝるまはれあまのまの神ありぬらん

後押山内大臣 友原基家云
續古今集

よひのまのいひの思ひかゝるまはれあまのまの神ありぬらん

竟憲法師 山國紀行

あひのまのいひの思ひかゝるまはれあまのまの神ありぬらん

道真准后 山國雜記

あひのまのいひの思ひかゝるまはれあまのまの神ありぬらん

忍社

名寄小裁と名寄抄類字松葉歌林載せと

枕草紙と云本林ハ忍の森

八雲御抄と云志の人の杜陸奥

交本集と云志の志乃森陸奥

山國紀行と云忍の思油井島あといふは忍の森

と云いふ

名所方角抄云忍の園森

江戸志云忍杜 方角抄を引
手紙をよみたる

武江披沙云蜘蛛網多葉集云東叡山の六極野
又云忍の園といふ也池八丹穂の海をうらうこく也池の
向と八忍の森といふなり其森も今八おろくの大名く
の屋形の地とあり

樓と云く名所方角抄云忍の園森とあり云くこれを忍
杜八きとらう忍の杜とてふ如きは云く池の面を忍
杜といふ説ありと忍川忍橋の形もく後子階舎をく
くあつとや

藤原経朝卿 丈夫集

名所一抄云忍の園森ののみちを此といふ時あり云く

顯昭法橋

云く一説ありは忍園と云く忍の木の森の林やまぬん

よき人から次 歌枕名寄

人志れと河内建と云きくはく我れ忍の木の森の夕ぐれの夕

霞関

名所抄名寄松葉歌林並に載と類字載せと

風土記云在原郡東限霞関

丈夫集云霞関 國名を
記さす

藤原草云霞関武蔵

田園雜記云々此河より入るはよやうりて云々名々云々一書
算を懸て云々此園をこゝろとて云々此河といふ所也云々
名所方角抄云々此園西云々此園あり此河の西云々此河富士
云々此河西より川なり云々

紫一本云々外橋田の所門をゆく此所門より南へゆて浅井
氏松平綱晟の屋敷と松平右衛門佐光之の屋敷の間の道
河のゆる坂を渡る矣と云或人云此河より南の方乃坂虎
の所門山王の所坂と須山の園といふ云々一河なり云々
古名相馬弾正昌胤の屋敷と云海より岸の松竹あり
云々一河記云々云々一河云々此河より入るは海に注ぎ
云々水色長天と云云云

江戸砂子云々此河奥州の往還ありといふ
求源雜記云々四谷大木戸往古の所也園この大木戸あり云々
奥州往還大木戸武州の大木戸とて往古の園なり云々
武蔵野地名考云々此河奥州往古の往還あり云々今も此河
郡にあり

江戸志云々此河奥州往古の往還あり云々右大將頼朝天下
と治め諸國の守護をこゝろに在園の地頭をよとて奥州海道
を隔河川に隔りて此河の林業と要害と接する園と名付
江戸太郎重長是と云けり云々往還のよとて此河山稲荷の
社傳より云々云々

又云麻布橋田町裏山稲荷と云々此河奥州往古の往還あり云々

地の此此西と移さるゝと

又云大木戸を鹿園といふの非なり大木寺の山号を鹿園
山といふより何やまるなり大木寺ハ元鹿園近邊に在後
此四谷と移るよりあり今以山氏を鹿園山といふ

武藏志料に云鹿園の西首を考ふるその據なり武藏野
の曠野といふ江戸の近邊ハ山川の險阻もあけまへり
そととも知つゝ此野至りても本野とても穴門ハ山河の
險阻要害の所とまうけおくるゆゑさる所方てなり箱
根碓氷の如きこれなる要害の所と今俗に傳へ様園と
此名有と今その所とるるこ首て園氏と云き所とるる
又或云四谷大木戸の先大木寺を鹿園山といふ所の所と

又麻布を山福所との所といふ所の所と云文ありま
し毛麻布と云ふあり山丘のある所の所と云わ
あつんと思ふと毛ま何の徴をかりて園推のまは
てその益ありと

江戸往古圖説に云鹿園舊址今藝州彦根城の舊
わたりといふ傳へ云往古藝州往還ありと其の方海ふ
はき遠く瀉まき岸の松生ありと云ふなり
の云渡橋をさるる鹿村と云あり此云を鹿園の所と云
を謂ち宗祇云西の方高く富士と云ふと東の方川流る
と有田園雜記に云鹿園を越く巖窟といふ處有と
云云況遍くして一定にわたりおれりる名なる古往今と

里を二子降威より及る地境より昔を今に改り世移り
物換りて蒼海桑田の變かたよあはれ今編りて
多しこれハけり古く系際より陸奥の往復の地にお遠
有まし一そ境の海を考ふる外樺田西南の方高く富士
見坂より又赤坂津門より向へりること餘程の坂なり此
地まで高き如き山とも云へなる也

按とるに江戸志武務志料の記よりみせるに似たり風
土記よ荏原郡東限を鹿園と載るを今此樺田の鹿園
と云れハ荏原郡より東にありたるの疑われと風土記の頃
ハ樺田赤坂より荏原に属しこれハ今の鹿園よりよく方
位あり名所方角抄より西に有園あり東向乃西に有ハ富士ハ

んを以てしるがといふに陸を以てしるに似たりやハ遠
くぬ書けり古く相馬昌胤の屋敷にありて海より岸の
松生所りたるより舊記より見えてりて載るより東限
鹿園といふる疑はれ江戸志よ鹿山稲荷の社傳よ
右大將頼朝よりありて鹿園と名付るの記を吾稽といふ
るに風土記にもありて鹿園と載るの外古き歌ありて
ありとや志料ハ險阻とありこれハ園山成おるといふ記も
中々心得たり一英徳國不破國按摩國須磨園ありて
とるに險阻の地もあり及今記よりこれハ樺田のあり
るハ切りて平坦の地ハいひて麻布の裏山といふ
險阻とせんこれ幸強附會ともいふて一其國雜記ハ

叶園紙越てきつ窟といふ所とてはより多應郡とては
んやかと疑あれとこれハ淺草紙とて新羽といふ所は
き侍と云文例よくあつらはは地の地とてさういふ
理何らんや

慈徳和尚 拾玉集

峰子名も毛鹿の園よ存すけりるり人紙立と海とて
同 丈夫集

吾妻よは吾妻の園乃名れとて春とることを人告らん
藤原定家卿 家集

やとてつと越ける妻の候とや毛鹿のきだの名めとて
吾妻光経卿 家集

心あてあそれとてさる梅花を妻の園のはる乃夕とれ

光明峯寺入道 吾妻道家公
雲々集

妻とてあつとてさるつとてさるの園やとてさる

吾妻頼氏 枕名寄

とてさるの妻とてさるつとてさるの園とてさるの

吾妻為氏 丈夫集

空のつとてさるの妻の園やとてさるの月とてさるの

龜山院御製

とてさるの妻の園の明のつとてさるの白とてさる

従二位宣子 新子載集

よのまのつとてさるの妻の園とてさるの目とてさるの

藤原為方卿文集

わがそむる園路の名のそまをそまをむかり武彦神の系
藤原為世の續子載集

わがそむる園路の名のそまをそまをむかり武彦神の系
よも人志の及新拾遺集

いづれに名をのそまをそまをむかり武彦神の系
頓阿法師文集

東海や雲の載とるお飯乃山や雲の所園とよめをそまを
道真准后回國雜記

阿波雲海の雲の園と幸とそまをそまをむかり武彦神の系
同

都中といそく我をのそまをそまをむかり武彦神の系

待乳山

名不極の待乳山大和下總二所と辯基法師の歌を
は下總の載と類字に下總とと名寄に大和或は紀伊と
辯基の歌を大和の載と松葉に下總或は紀伊と其
歌を下總の載と歌林に下總の記に其基の歌と載せ
又紀伊一説大和のそまをそまをむかり武彦神の系

按とるに下總の待乳山今武彦不系と説にあらむと

弟系集の亦打山

八雲所抄の云はのら山大和又在東國駿河也又在紀

伊國を以て國山を其土山と云ふり又まはら駿河也と云ひ
て伊國の國山を以て云ふなり

夫木集に云まはら山見打又駿河

藥師系に云まはら山山嶽又其の山下総に國名あり或大和
國國雜記に云當寺の古跡を淺草寺と云ふ云々其跡の
乃と云ふ名ありの多かりき中まはら山と云ふ山あり
萬葉代國記に云亦まはら山と云ふ山あり其山あり
津島ゆき也けまはら山と云ふ八雲津抄に駿河と云ふ山あり
孫くまの山と云ふ山ありまはら山と云ふ山あり
其の古國に云ふに伊國に決せざるなり其もあれ其國の國名
あり其まはら山と云ふ山あり其山あり其山あり其山あり

と云ふ山あり其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり
其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり
ありぬく其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり
其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり

勝地吐懷編に云八雲津抄に云其まはら山と駿河と云
まはら山あり其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり
と云ふ山あり其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり
其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり
駿河國に屬する

伴蒿蹊云今に總角國川近く淺草の邊にまはら
山と云ふ山あり其山あり其山あり其山あり其山あり其山あり

抄りたる人者淺山のみならず山崎の里といふ
所ありといひこれと伊勢物語のうたよりを名づけ
しぬるべし此類のうた多し好事の人乃西爲
ある也

又云代田紀には此歌を注しとく下総と名乗し
管前後遠くもや

按じると勢沖といふは雲流抄のけまら山を駿河
と注せしむるなりと訂正跡ありといふべし流抄の
ほつら山大和とあるはその本説より又本國を駿河
と名乗し伊勢を在るその一説ありきればたつら
これ駿河と注せしむるべしといふべし又流抄一本

中まら山河とありと駿河の字かきしをわたりゆ
こえりといふは流抄の注しにひらきと載りいひて
はまら駿河とあるは再び駿河と注せしむるべし
是れまら山河とありと注しにひらきと載りいひて
こその山河とありと注しにひらきと載りいひて

江戸砂子と云待乳山又真土山聖天山と云

再按江戸砂子と云ある人の曰待乳山といふは
板敷に伝をたしむるは隅田川の傳りよりゆりす
し川の武藏駿河大和とあり此訂正の事も駿河の
と云ふ川なりするは待乳山あり好事の者流と云
名流けるなればは改訂して可なりと云ふことある

へはきとはひは待乳山と云ふ事も既く之に世書らる記
よりこの俗の俗に地名とて記す事を得たりと云ふ事
山といふ事も亦茂睡の碑より百餘年と云ふゆゑ云々
と是非とて一考すに於て後人の評を待たむ

騷列名勝志と云ふ其基の哥の亦お山を文字の上のま
まいふらひと稱し後よとてはのこをたおらむ其
山よりいひてはをたおらむと云ふや
隅田川考よき真土山の隅田川のなりゆきと云ふ方あり
此西戎世よ山の宿といふは真土山なりといふれ名ある
よや古くあるよやの山ありといふ用事あるやと云ふれと
今ハよりいふ事ありてそのうへに聖天の宮居ありと云

自傳の山といふ處くも之を後世に傳へし事
江戸名所記といふもの記するにむしこの山より金龍
とほり出ると云ふゆゑはを金龍山といふりと聖天の
山あり大なる松山ありといふ事ありと云ふこと
これ武藏の國の名山なりといふことありと云ふ事あり
方に浅草川といふ事新國と云ふ西のふた方ありと云
是の記よりいふ事ありその内ハ山の事ありと云ふ
載りたるかゝる事ありといふことありと云ふ事あり
宮居ありといふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
山ありといふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり
合はるとその事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

寛文の頃此事に著しやう百五十年に於ては
その頃よりかく此の事々々数百年の事なり
いふ事とてさかうおとるるはなほ山の名
初と兼集といふとある世より名なる事
なれと世國の事ある他の國も同名の事ある
先達の祝もさあ〜あり〜あるこの國と治
定〜の〜とこれと文明の頃より〜と
いふ事古くよりいふ事あることなり

樓より大和とあつら山角古川あり〜
紀伊より山の名と〜川名あり〜
とのにありと〜と強河あり八雲御抄より又東

國よりといひ藤原系にありとも同名ありといひ名
系抄より各基の歌と下総と載せ類字にありと
下総〜松系歌林といふ各基の歌をありと載せ
ぬれと山國紀伊東岬といふ〜
田園雜記にも後系寺のり名所とも多あり事
中にまら山といふ所とあれ文明の頃とて
河系にありと〜山武系あり〜
ゆゑに今定〜と〜郡といふ〜
系を流〜といふは懸度の〜
系に砂利場と云地名の〜
ありと〜と泥河といひ〜

より穰多村を元祖如の地を賜りて穰多寺を建て
て築きしといふされはのらに川筋のうけりしその地
形こそなるなり

又按るに穰多寺縁起に土師真中知と捨前成
竹成兄弟とありを之社控現にまつるよしといひ志料
の記より真直の仇とく尸ありといひ今穰多の
縁起より真のちん人の字成補し真人の作らされ
とそ土師の姓ふ連宿祿の尸あれと直及び真人の尸
ありハ杜撰なり又中知とありともよむといふ世
より其のちんかきとあり之業のひよるといふ古縁起乃
如く真中知とあり傳ふマツウチと假名成りせり

これに接ふ中つら山ハ所謂真中知を葬りし舊址
とく其名をのり山の稱しなる所とてまつらる
いふなり今も聖天の別當本龍院ハ穰多寺の子
院なるのかとくゆゑありのやうと考ふ

辨基法師 弟集

まほら山夕越りくむ所の角古河原に穰多を祀ん
て人々を以

阿のいひまきいひく君まつら山といふ人多そ面あり
持僧正永縁 文本集

君の代をまつら山の小松とてまつらる穰多を祀るといふ

知海法師

まひらひはちのけんやきつひん角回河ふたふもふり
郁芳門院安藝

月うけたるやきつひん角回河ふたふもふり
藤原家隆々 古今集

志らひはちのけんやきつひん角回河ふたふもふり
同 支本集

誰ももふりやきつひん角回河ふたふもふり
敦基 定家 新古今集

海原ら山夕織ひ八風きつひん角回河ふたふもふり
敦基 季子 廣 支本集

夕されハ若狭まひらひのけんやきつひん角回河ふたふもふり
清人 支本集

清人 支本集

夕されハ若狭まひらひのけんやきつひん角回河ふたふもふり
道真 准后 田國雜記

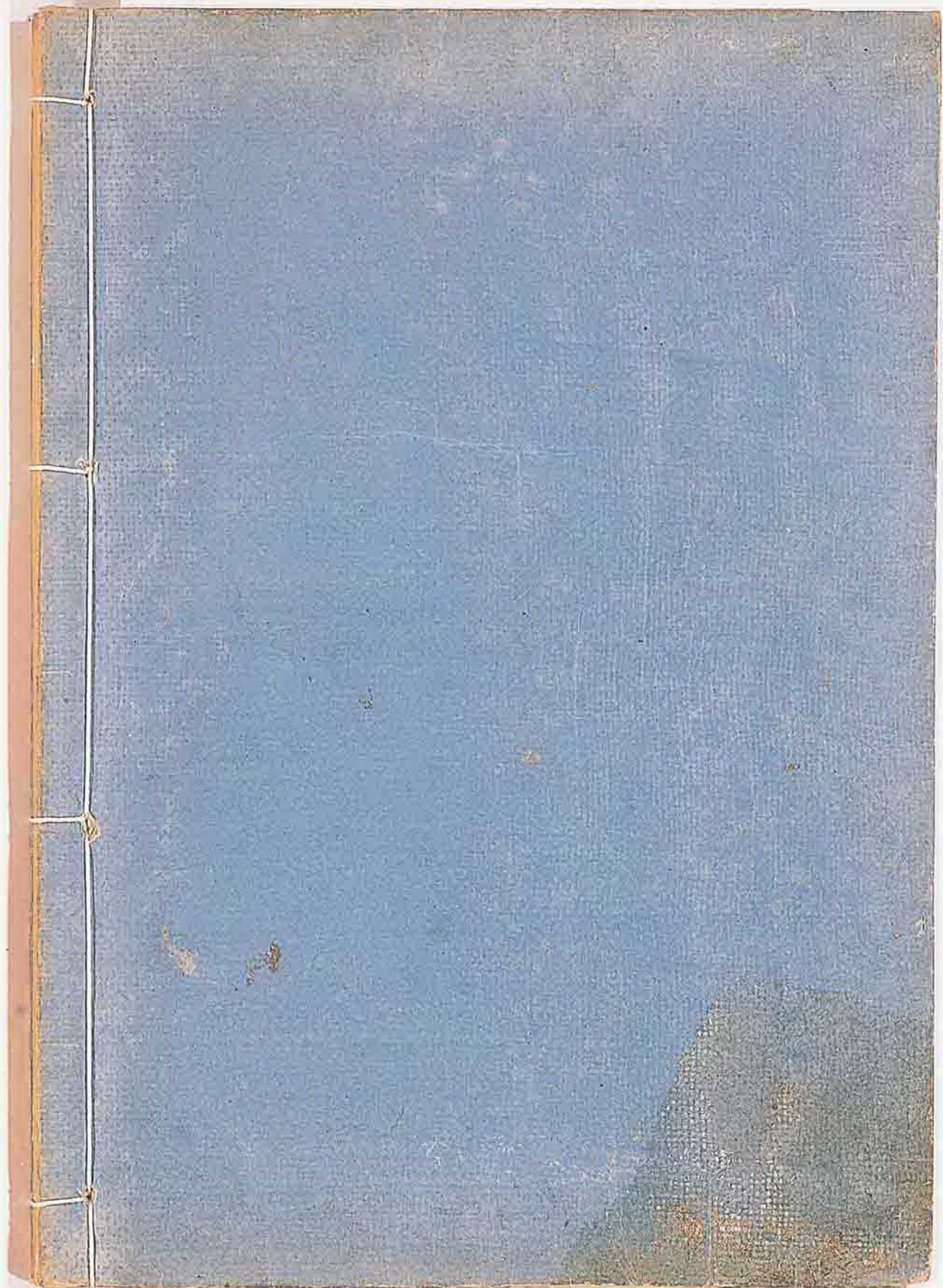
同

志られてもはあふのふらあまひらひのけんやきつひん角回河ふたふもふり
右豊島 郡

右豊島 郡

17





武藏名所考

龜

L290.3
1

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

武藏名所考卷三



葛飾

名所抄類字名寄松葉歌林並下總と載と但名所抄
あり葛飾浦と作名寄と勝鹿と作る

萬葉集と云可豆思加又勝牡鹿又勝鹿又可都
思可又可豆思賀

仙覺抄よかひーろ下総の國葛飾の郡ありかの川
志のれ郡のなつた大河あり婦と井といふ川のむ
とと葛東の郡といふ川のありて葛飾あり

梶崎陳人編

とつかり

延喜式よ云下總國葛飾

和名抄よ云下總國葛飾加止
思加

丈木集よ云かひののうら下総

按よるに葛飾ハリと下総の郡名多れと今も利根川の西
と云く武務の葛飾郡となされと云そとて載ぬその
説角田川の下にありす

よも人よら萬葉集

みりられかりのせとにんそとのあつたはる

源俊頼朝臣家集

かひのたつた國のうらなまはれくみたなるのうら

藤原道經 續後撰集

よひの浦のたつたのうらなまはれくみたなるのうら

角田河

名所抄よ角田河下總駿河二郡と云下総のよ一説
武藏通兩國故と注し辨基及び仁業平朝臣の歌と載せ
又駿河のよ一説大和と注し源家長朝臣の歌はら
すよ河のよといふ歌と載し類字松葉歌林角田河下
総と載しと名寄し仁田河武務と載し

按よるに角田川武總の堺の川かよゆと或は武務
と云く或は下総と云く事疑ふといふれよ今葛

飾郡の隅田村の川にあり下総の川にあり
よや詳し後凡編に

萬葉集の云角田河

仙覺抄の云角田河
八雲抄の云角田河

建保三年内裏名所百首目録の云角田河武藏

文木集の云角田河武藏大和伊勢

藤盛草の云角田河下総又在駿河同名但是武藏大和
と云候あり

在原業平朝臣集の云角田河
世に云ふに云角田河

角田河

遠くありてきよなりわし
の川にありて

はなはたの川にありて
はなはたの川にありて

はなはたの川にありて
はなはたの川にありて

とありてありてありて
ありてありてありて

ありてありてありて
ありてありてありて

古今集詞書の云角田河
の川にありて

ある角田河の川にありて
ありてありてありて

きれきれとありてありて
ありてありてありて

ありてありてありて
ありてありてありて

ありてありてありて
ありてありてありて

ありてありてありて
ありてありてありて

とすなりと武務の國の日記よとつりてむとす
の中よあてあて川といふに在又仲ねのいふとつり
とよとけふとつりて仲ねの集よに角田川とあり并
母とわたりぬれにさかすの國よなりぬと何るはむ
かす一仲ねの集とむけ物語紙さきとむや但孝標
女上総の國より都へのあるとて経るれとる乃紙とる
さきこれと更級日記一向用とすきとある所
系系集才三よ并基法師とつら山夕とてつて
いり勝の角左河原よとむとりかも移んとよめは
後河がりといつり又業平のみらむくのかと下河
わると下総の何せんとも越られんと字とすも

いこれあるに更級日記を引合とれと角太川の
名これこれうとあり有

武蔵志料云更級日記の異本に武務と下総乃
國と此條より別有とて今の世に言傳ははとく叶
とも或は後人のとてささやうふ入遠とるもや多本とな
武務相控の課とありのこの作者まゝ幼稚の童女の
たるものなれと聞たりとあも有といわれ定かてあ
高田與清云此日記は太井河隅田河多磨河相控河
の四河とあり混とて書これと證よとてい
異本更級日記云下信とるのとやとむとていふ
あるあて川とていふ在又仲ねのいふとつり

くまのわたりあり申移の集より隅田川とありあるのき
まのころにわたり此川はせめて云々武務と相移とれ
申よりよる川といふ舟までわたりぬれ相移のころありぬ
高田與清云々といふ六異本にふと并のころとある
とたゞ〜といふ〜義經記三の巻頼朝謀反の條より
さそをそよとあるん〜といふ〜といふ〜といふ〜
孫ひたり吾妻鏡一の巻治承四年十月二日の條より
武衛相乘千常胤廣常等之舟楫濟太井隅田兩
河かと書たまはかりきて太井河を今江戸河と
是新利根といふ河の事〜と云々吾妻鏡九月廿九
日の條に武衛當時御在所下總國十月一日條に

武衛鷺沼御旅館かといふとて太井河の彼方よ
おけ〜に常胤廣常より舟楫の設より〜河をわ
り武藏國より赴り途中隅田の宿より乳母寒河
尼に逢き〜とある〜九月廿九日の條は葛西三郎
の太井の要害とあるも今の國府臺ありたりたる
押〜とある〜に〜おけ〜かかれと太井河は下總と
武務の境の今れ江戸川より隅田河は武務の國内
の河ある事阿事りのありそのころ葛飾郡江戸
川よりこれハ武務に隸す後より下總は隸すを
と別よ考あり
按〜に通行本更級日記は志の〜とある

の國乃ささのひめく有むと云川といふも相通と
稱し即吾妻鏡より大井ありて一濟太井隅田
兩河とありて按れハ大井川も今の江戸川一名新
利根と云川なり更級日記に在る中野のいささハ
んとよそもあつたりなりといふその頃ハ江戸川と
隅田川と水上相通しこれちかくあるされし也
そく業平の時も隅田川とよそも一堤とせるとい
たり其の種もむつしよりの傳えのころて隅田川と
も武藏の境とすしより総と相との音らうを
あやまりけ川より西と相接の國と云はるしん
されとむししをかまの中にあるあまし川といふこれ

そ今の隅田川のやうよそゆ又あまみのせといふ今
の葛飾郡柴又村の辺よあるかまきの池あるに於
まのこやの流る今の松戸のり也やれ考へし

吾妻鏡より治承四年十二月二日武衛相乘千葉常胤
廣常等之舟楫濟太井隅田兩河精兵及三萬餘騎越武
藏國豊島權守清光葛西三郎清重最前泰上又足立右
馬允遠元兼日依受命為御迎泰向云云今日武衛御乳
母故八田武者宗經息女相具鐘愛末子泰向隅田宿則
召御前令談注事給

源平盛衰記より兵衛頼朝ハ平家の軍兵在國下
向のよそ國のひ武藏とす總との境なる隅田河の上陸

をとりて國々の兵伐めされり

義経記云治承四年九月十日武藏と下野にさきつひ
なる松戸の庄市川といふ所よはきつる小泔勢八万九千
と我はつえはふそに坂東に名をとほる大河一河ありこの
川のまゝ上りて此國利根の庄を系といふ所より流る
まゝのみ遠く東よりてある在五津將に隅田川と名
はけり海より流るる河に源より流るる雨より洪水岸
をむくくそあるれり此河といふ海をさるる如く氷よせ
われく又日蓮留しめひすまゝのわたり西より陣立く
やうに流るる櫓の柱六馬とつゝあるく源氏を待たり

高田興清云此文治承四年九月十日とある吾妻

鏡云河を以吾妻鏡一の巻より十一日武衛巡見安房
國九御厨給とあり武務と下野の境と有る下総の誤
かり更級日記にも書河をまうたる例あり松戸の庄市
河といふ所とあるは下総の國内にて大井河よりハ彼方
かゝる一吾妻鏡一の巻治承四年九月廿九日此條に
當時御在所下總とあるは十月一日の條に武衛鷲沼
御旅館とあるをかくく下総に居るは一説なり坂
東に名流るる大河といふは太井河の事とて今に
戸川とも新利根ともよぶれ此也在る仲物のこと
た川とて名はけたるといふも誤なり是とて太井河
と隅田川とありひたす一書といふはなり流平盛

嘉記平家物語の長門本屋代弘賢主の隅田河埋
本記の考證より引きて源平盛衰記羅卷をこれに
その部人よりきき流してあるなりかまふあるまじ
しきにも阿はたすんこのころあふし陣取ての上
江戸太郎のれをききて待設しよりの語ありは
らんこの脱落せり

北條九代記に云上総権少廣常八當國の軍勢二万餘
騎引率し隅田川の邊に東向し云々隅田川と云り
て武義國に入らぬ山葛西足立の人々馳付たり
又云文治五年七月十九日頼朝々奥州追伐の首途し
ゆふ千景介常胤八回た橋門射知家名東海道の大將

とて常陸下総兩國の勢を率して宇太行方を強く
岩崎より隅田川の邊に渡りて

史本集に云安嘉門院四條東へ下付りたることと云ん
たりと云とあるありし我々かこの部多か六の奇
海流記に云あるをかく流るると云わひのちと云はれはと
りたつてひのちと云と云りたつて河の邊に止まりし
くと部多といふ名のと云と云とあるはけうらに有たり
太平記に云小舟差ふより石濱まで坂東道すてた四
十六里を片時の間をて追はせしむる將軍東石濱より
あつりぬ

隅田川考に云天正本太平記に石濱を隅田川は流る

靜勝軒詩序云城之東畔有河其流曲折而南入海
商旅大小之風帆漁獵來去之夜篝隱見出沒於竹樹
烟雲之際

靜勝軒詩跋云凡遊關左者必以見富士山過武蔵野
渡隅田河登筑波山則皆誇四方觀遊之羨也

又云亭曰泊船齋曰含雪云云西北有富士山有武蔵野
東南有隅田河有筑波山此四方之觀在此一城也

北國紀行云隅田川のやうり多越の舟きれ艦して
角田川よりかひぬ東岸ハむさくおの法けり利根入間
の二河おらゆる水は彼古き流りあり東の濱に漁村
あり西濱より漁村有水西悠々として西岸に即くと

晚霞曲江のわかれ舟野まよとく影のと地り色筑波

蒼宮れまよあつり富士碧落の西より絶頂をこよ

きえとそ舟よ夕日波岸勝月空よかると扇雲尽く四

城を事なり云々入間の舟渡りまよと見物くる人あま

たゆりしに角田川の船きりいつををわたりともあつら

小舟のゆりよこのの青のまよあつて暮にまよゆり云々

田圃雜記云かくて隅田川のわたりにいりくまよ

舟よまよ枝渡あつていあいの塔のまよとまよまよ今れ

くまよにわたりまよとまよ舟のまよとて川よまよとてゆりて都

まよとまよのまよとまよとまよとまよとまよと

東路の法とまよ江戸のまよとまよとまよとまよと

川の河舟も下総の國葛西の庄此河内と申す計より
河内志のくをりしと云程を難波の浦よかよひま
まこれ位く思く見えたり抑か程なる地はくま
ちして今井といはれり抑て浄土門の寺浄真寺と云
名元方角抄よ云角田川下総の中なり 郡名ト云り
入川の川のまのれのまなり

又云荒川といふ河内山より流れ出る所よりむの
かろきある大河なり

武藏野紀行よ云大河の庄ありてやうくはま
川よもつきぬ河つくと云はれまことんはれなるの
とありとあるきあるのむきありてまるとありとある

この河内志

梅花無盡蔵云開窓則隅田河在東

又云木戸公号罷釣翁得和歌之正脈余在洛而聳
磬久之矣今也共寓武野之佳境隅田上流往還無
塵月又云都鳥隅田之故事也河邊有柳樹蓋吉田
之子梅若丸墓所也

又云道灌靜勝公招福鹿西山請尊宿并少年浮
畫船數艘於隅田河鼓吹一時之壯觀

又云隅田在武蔵下總兩國之間路傍小塚有柳
道灌公為攻下總之千葉構長橋三條

擧白集よ云角田河ちりしと云ては今もあ
る

しつちのわらわしつちのまをわらわんまこのつりあふはよ
あきふれ観音とて國のすくくめておの佛抄と云

又云國のつりあふはよのつりあふはよのつりあふはよ
あんすまのつりあふはよのつりあふはよのつりあふはよ
つりあふはよのつりあふはよのつりあふはよのつりあふはよ
つりあふはよのつりあふはよのつりあふはよのつりあふはよ
つりあふはよのつりあふはよのつりあふはよのつりあふはよ

惺窩文集の浅草之東畔跬步而有角田川輕舟短棹
浩歌一望有鳥翩翩可愛所謂背與脚赤者昭々乎倭歌
集中不問其名亦知為都鳥

羅山文集の武蔵國隅田川在武蔵下總之界有鳥曰
都鳥喙足皆赤形似鴨倭訓志義好食蛤昔在原業平來過

詠和歌

丙辰紀行の都鳥角田川の物なれハ好事の人せりて
燕上翺と侍をえりてまをえりてまをえりてまをえりて
さなりこの鳥蛤好くよく喰けるあり

竹齋物語の云々て行くてんれハさつと角田川にありぬ
つれせん武蔵の西のなつりてといひたれハさても都鳥ハ
隈かゝまきくもまぬるのふかま川波志つのみて水
の南のふりおきまの白きるれあまこむまをわたり是れ
かの物語の傳へて都鳥あり

紫条の一布の隅田川と佐佐川の末浅草川の上之三月
十五日梅若の祭りありまはるの人多し紫条は名なり

拙者の歌より都をを新し讀始とて豆の赤き鴈の
大ききもの多しといふもた孫の多し今も見えぬは此の都を
といふ白鷺のつゆ之背と見とる赤たれとも鴈より大
きく白きもの此大ましく形丸たき者也

又云五浦の目十八ヶ所の阿すく川都をよもをさし
思ふ是ハハ流泉為景今の流舟角田川の所此名あは
と川といふ名志くすは辺に隅田の川とくまきありそ
を流るく川を隅田川と云ふその事このけけけたふ
又角南と書てはとみとと讀ゆり阿すく角田川をすく川
とよもまきくをさしといふやとりく阿の字をなかり也

江戸董云云浅草川角田川とも云又三屋戸川とも云
川よをハ刀根川とも云なり

玉櫛笥云云後土御門院の時時長祿の頃江戸の大田
道灌入道くくゆく都このわりく阿やとて内裏入りけ
れと道灌ハ出まじり川のわりけに任めるようけけけ
及んせらるるといふく都名のくくハよこを知らんともあり
はれちかてまきりてゆく物語とまきりてさしり都をす
まじりて宿ちあれとまきりて奉りてまきりてみりて
あのみちくくを武務殿ハかやらの時とまきりかとかる
てなあれ花をちるのれと所製紙やいひはれハ道灌
てにちりかてかてまきりて身道の真加この事とまき
るまきりてやのくねひく出まきり

浅草寺縁起に云むの武蔵國宮戸川の邊より茅の
渙又阿り名付く檜態の濱成竹成といふをわら坂邊
と云く浦と云はるひ世に云ふ事と云ふ事と云ふ事
再訂江戸産子に云中古武蔵と云の川の中なる
といふ物語の文を證して人皆誤り川中の橋の
名は西國橋と名付たり於る不元孫のころ那のま
を葦の河のまのやをまゝといふ武惣の界ハ利根
川なる事再ひ世に明かり

武蔵志料に云都鳥と云く海への説く有くも白
鷗なる事疑ひかゝ個に鷗ふ二種あり大山は異
なるの之關東海濱土俗の方言と大鷗を濱猫と云

まゝに其形猫の如く食料といふ大鷗の如く山なる
物を鳩やとありくその形細くもまゝ一雲田川なりと
いふあるこの山鷗之常ハはあゝりれ川に僅に海への
有ちやゝ多海鷗とも積めを作する只南の風致は
海の高る時と云ふなり上に飛去く波靜なる雲田
川のなりと云ふあるは都那の人を海にまゝてて西
此を紙の見せしと云物も有と人傳ふの事少はそれの
是かといふ人言とも此白鷗をまゝに是と鷗と云ふ
して体ハ白く山にうゝき鳥かまは都那のさといふ所
らゝるれは推その人今都那と云名付ゝある

又云北條五代記今ハ諸國治り天下四海遠原の人

手ておぼゆるうて静ある時時代なり然れども兵
船多く江戸川にうつるにゆきつる今業に江戸川と慶長
の頃よりおぼゆることなるは知れりといふもおそ
らく今今の角田川の事なり一當時江戸川といふ
新利根川の事なりて其間國府臺下流る川なりて
是をかくめ江川といふ事北條五代記國府臺合戦
の條に記せり是は上野下野より江戸へ往來運送
の川ぬきつるなり但一宗長國志紀新東土産
といふ書に角田河の川ありて下野國葛飾の府
内流る日よりより一芦とよめく云と有この葛飾の府
乃月といふ今の山名木川の事なり是より中川を横小

流る新徳入なり一れたひ有ては是より江戸川といふ
新利根を此川續これハその事一浅草川の事一川流るなり
又云よき川の源ハ上野國利根庄後京より出ると云
と愚考かしく今の記を考あり是ハ今の利根中川を
のわたりと云一かかん今れはよき川をその源中野
父の中野より出く荒川と名つけしはかしく川筋あり
又云荒川角田川の源よりて秩父郡是立郡の邊まで
荒川といひ江戸より六角田村をぬき名有宮戸川
といひ浅草川といふその源ハ信濃國佐久郡金峯山
の陰より出る此中野川といふその水よりつるある流るく
流るなりなりその東に三峯ありはより二流よりなる

赤地とわらう河神流川の源とすこの千隈川と梓川
と合々犀川といふとそは越後國新瀉の海へ入る千隈
川也信濃川といふとそは越後國新瀉の海へ入る千隈
川の山中流経る川越なるき中仙居の熊谷堤の事を
流すそは戸田の流り岩瀬川口尾久の流りもそ有と
す後とすりて濁田川と名付く

横とすりてその名付く多秩父の山中流経る川越とすり
といふとあやまりて川越領とすりて比企高藩と郡より
流出る川といふと即ち入間川の事なり此川河越領の流
る所とすりて荒川と合せらるるなり

又云角田川の河舟とすく葛西の府の中流りてある

まてく中庄堅川通り流経るそは中川と稱す
河越の今井流りてありて又或は今の堅川ハ本
庄の用事と頃堀といふとそは小笠原川なりと中川と出
る所といふは二河とすりて又葛西の府ハ國府也
今の國府基なれと新利根の川流すなり

三芳野名所舊跡記と云熊谷下と流す是る川と荒川
といふと下とそは戸田川船渡之川越の水とすりて
東の荒川村と云下有流東是立郡の境を流る

四神地名録と云隅田村土人といふ村と稱し名をいふと
この川と此村より北とすく是立郡と葛飾郡の界なり隅
田村とすりて隅とすく有今を埋りてくぬりて流す

かゝるも何れの村の土人も古潟田川といふ所の古園の
名所古ありある潟田川乃実跡ある

又云中川と綾瀬川といふをたつて古潟田川といふあり
今も埋りてく川幅僅に一間余昔時中川と派ふり
て荒川へ流す今も海へ入るゝの土人の言ひ傳へ
古潟田川乃水と深ひく蒲原村ハ古之跡とて今も
宿といふ地名残まり云々今潟田川と稱せる地ハ二
百四五十年以前を海へして川のある處をやうあり
たつれり土人の言ひ古潟田川實跡なる

潟田川考云々この川の上をく東へありて一派あり
これその源流を推してり利根川といふ義經記

南田川を利根の庄友系といふ所より流るゝ多かみ
遠くといひ北國紀行に利根入間の二川ありと
いふ是れり此川もあらんも流のそと廣くといふれ
といふその流のうらわく荒川とよみいふも
とされとわつた心保の頃國のよとよと廣く
川といふは昔年よりハ近き所は

又云古潟田川といふ小川あれとあり此川必
古今流をこたせしとありと古くは川は
この外廣くありて廣漠の田疇を帯り河東あり
とありといふと古くは多く潟田川と
されり今の潟田川ありといふ

抄のいふ所も又なる所ありて其れは海なり一河に流る
の大河とありしことゆ義經記に雨ありて流る處に
むしと流るしとありて海をさるること一と是あり
まに北條氏康の武藏地紀行に此河のむしと安房
上総中のあしと見ゆることゆはは雨所なりと
けく河のむしと名に廣くこととあり一おのむし廣
長のころよりけりる河を次第に新墾の地とて人
をまじやせしむるにありてせむるに流るやうに
古のころの二河とてありたりなり一これ等
の河をさるるに流る河を廣く細流ありこれ古隅田
川の二なりとて是ありて流る廣くありたりなり

ふる隅田川といふ人もゆゑなりて四神地名録に云中
川と綾瀬川とよきなりて古隅田川といふあり云此流
うけむがたりのあり土人の古隅田川といふなりとあり
きり此河田の口碑に傳ふるに云くさるるにその據と
て今に今に隅田川を武藏上総の境なること流る
ことありて古きことゆはは海をさるること一と是あり
隅田川も武藏と上総の國の境ありと云く昔古
よりの隅田川とてよきなりとて又今に隅田川と稱
する他ハ二百四五十年の昔に海ありといふことあり
れ流るる一圓國雜記北國紀行梅花無尽蔵等
の書に云く二百四五十年に抄に云くものなり是なり

のよき所なりともなるなり又江戸古園といふ所のよき
よくありたり人乃は之を信し古記によき所なり
世の人或は之を信し之を信し

按するに隅田川の葛飾郡の隅田村といふ地ありて之を
小湊といふゆき隅田川と稱し之を改通して此川
の名を六甲山人に戸田村の渡のわたりとせば戸田川
といひ浅草れわたりとせば浅草川といふなり又
宮戸川といふも今の三谷といふ所昔も之を唱ふん
そゆきとけ名ありしや又水よと荒川といふを秩父
大湫より出るゆき志料といふとく水源を信濃國
と發すれども本筋として秩父郡中津川とて源と

是よりそれより下をて秩父の渚水相會上野國甘樂郡の水も秩

父郡の習とてとて凡一大河とあり榛沢男會兩郡の間を奔り

大里郡として東南とむいたを足立郡の地方を横見

比企入間新座四郡の地方を過く豊島郡に入るとこれ

とて名のたをふり足立郡葛飾郡なり又横見と比企

との境なる市野川も荒川の會し比企入間の間とて

都幾川押色川入間新座の間とて入間川新座郡と

ては折瀬川來自川豊島郡とて大湫飛川とも荒川と

會しとてこれ今の隅田川の源流大湫といふなり

又元荒川といふも大里郡熊谷宿の西より今の荒川

とて是崎玉足立郡の間流なる所とて大湫飛川

とも云 四國雜記にありの條といふ所より云々岩越を以て河
 何人か其の種を養ひせんといふ所より又古名河やいふを
 後瀬の字を以てせしむる 崎玉郡高岡村より二流とある東
 流とあるの河後瀬の本流とて一流とある所の方より今利
 根の分流と今より崎玉郡の中央を東流し岩越越を
 歴中島といふ処より又利根の分流 西謂江戸 今より同郡
 八條原と葛飾郡二合半領との間を南流し 猿股と云
 西を過りて隅田川と利根川との間を流るるゆゑ是と申
 川と云ふて後瀬の本流ハ三三と崎玉との間とある事
 教里よりして三三郡内近新国久左衛門新国の間より南
 して三三郡千住二町目分と葛飾郡隅田村の間より
 隅田川と今 内近新国より千住までの川を後瀬川といふ 此れ
 古月と稱するもの是と云ふ 又古名江戸利根の水中川と通し

今の須田村と切村との間 又古名江戸利根の水中川と通し
 是と稱するもの是と云ふ 又古名江戸利根の水
 折をいふや今も此有村の北に古隅田川の跡と云ふ所
 あり是と三三葛飾の境と云はれは流るるといふ事
 及かの江戸利根の水の中川と通し 是も富永の流と
 より後ハこれ堤を築き溜と云はれたりといふ事ハ
 隅田川ハ今の荒川を以て本流とすれと云はれり如く
 今も後瀬川の上流元荒川といふを今の荒川とすハ
 入間川を流るる十餘里を經りて武蔵の山より東へ元
 荒川と今より流乳山の所を流るる一ありんされハ隅田川
 とのやハ隅田村のやよりより移せる名よりして流ハ終り

發せしといふも入間利根の二水も相合するゆゑに義經
記に隅田川を上野國利根をより流すといひ更級日記に
も丹川在五中將のいさこよりいさこよりといひ
北國紀行に利根入間の二川おちあはるといひ方角抄に
入間の川のあれの流るりといひ共々流るるありて
既し合して流るる下流よりいさこよりといひ利根川の末
も入間川の末もいさこより又義經記に末にありて
在五中將の隅田川と名はけりといひを今時の人を市
川のいさこよりを隅田川と合はせやうなり流るる
雜とれと義經記に末にいさこよりといひをみあはせ
いさこよりいさこより文なきに市川の流るるに遠くよ
りて

利根川をも隅田川の水とて合はせむるなりは也

又按するに隅田川武総の堺なるをむりより武陽
を今利根川をりて武総の堺と定めりなり
歷その記すらくなり再訂は戸砂子元録のころ
郡のさとのとありてありてありてありてありてあり
年本所中郷林諸島別荘の庭に建てる碑に葛飾郡
本下總國也貞享三丙寅春閏三月割利根川西屬武
藏國と志るなりは伊奈氏の旧藩を據りてなり
なりて正保二年に國圖にきりて利根川の流る地を
本州に國にたすに疑ふなりはありて一説に中
川を堺とするなりは武蔵の葛飾郡と唱へ東の方を

中絶の葛飾郡といふは何と據るはたしむるは

源師頼卿 堀川百首

任田川おせきたかほきく波のまの言ふ魚死ゆるそそむ

源俊頼朝臣歌枕名寄

契ありくはしつたあれを南田川がくぬ水のこころとて

二條皇太后宮大貳家集

君代とらむをなごひんかみ川かりまらけ影をうけ

後京極 藤原良経公
月清集

むの思ふ南田河系くまよあるまを昔ありてくはくや

藤原俊成卿 新勅撰集

わさふ人し身まもるもゆるりてはなす川系ゆかき

同 新拾遺集

ささ川おんおのふたふれくあきことそは部多くの南

慈鎮和尚 拾玉集

時〜あれささ川系部多の昔の人乃こころ〜然とや

同

南田川部のか〜浅詠れを多そいつ〜を露の〜と

同

藤れを秋の萩の月さ〜川友をそあけは部多〜と

同

誰のま〜船を〜と眺〜ん南田河系乃〜川雪は

藤原盛方朝臣 新勅撰集

恒國川せきうにむせふ水のあをたけぞれあはにひをゆん
後鳥羽院御製 御集

あまりん誰のちまご角田川名ありおのち八阿りやあや

後徳大寺左大臣 藤原實定公 家集

うちささる川をたたくはく人細くも鳴ちりり那

鴨長明 家集

あまきくふも鳴たよりとさし川いさごと向人名にたてはる

藤原定家 家集

水とまの流かきあはれささる川いさごと向人名にたてはる

同 藤川百首

夕霧にこそ同信ぬささる川我友舟を阿りやあや

藤原家隆 卿 壬二集

渡ちわさくぬたさうちかかせすささる川名をたてはる

同 玉吟集

十文の月をたてはるささる川名をたてはる

寂蓮法師 家集

ささる川をたてはるささる川名をたてはる

同 交本集

ささる川をたてはるささる川名をたてはる

順徳院女房 建保百首

ささる川をたてはるささる川名をたてはる

行意僧正

都島角田河原に船がぬきく回き人かたは
藤原家衛卿

誰くも伝多河原に船がぬきく回き人かたは
藤原俊成卿女

むつと思ふ心もいづく角田川昔はわづらの渡ありたり
同

昔はく月を雲井と角田河原よりかたはわづらの渡ありたり
兵衛内侍

都くもわづら月をいづく角田川昔はわづらの渡ありたり
藤原忠定朝臣

わづら月をいづく角田川昔はわづらの渡ありたり

藤原知家卿 現存六帖

宮古よりいづく角田川昔はわづらの渡ありたり
同 建保百首

すみれ川昔はわづら月をいづく角田川昔はわづらの渡ありたり
同 丈木集

伝多川河原に船がぬきく回き人かたは
藤原範宗卿 建保百首

名もわづら月をいづく角田川昔はわづらの渡ありたり
藤原行能卿

わづら月をいづく角田川昔はわづらの渡ありたり
藤原康光

後身志ん〜やん〜角田河ぬれぬといふ言を待ん
藤原為家卿 現存六帖

都多あ〜い〜お〜す〜川き〜わ〜てや人をよ〜

同 支木集

みお〜思〜有〜月〜の〜川〜の〜け〜ら〜り〜千〜多〜た〜

後醍醐院御製 新拾遺集

か〜り〜ぬ〜く〜遠〜く〜ま〜り〜り〜ま〜り〜河〜の〜こ〜も〜の〜名〜を〜い〜

藤原信実朝臣 現存六帖

さ〜り〜と〜も〜程〜や〜い〜ち〜ま〜す〜川〜た〜ら〜ぬ〜れ〜郊〜名〜の〜事

藤原隆祐朝臣 新續古今集

此世〜は〜よ〜〜事〜と〜す〜角田川〜と〜え〜ぬ〜方〜の〜名〜は〜名〜り〜し

後九條 藤原基家公
支木集

あ〜り〜ん〜角田河京の郭とむ〜の名れ跡〜鳴〜

中務卿親王 宗尊親王
續古今集

け〜り〜さ〜ら〜〜川〜事〜や〜い〜り〜い〜の〜あ〜る〜名〜り〜と〜い〜す〜

よ〜み〜人〜と〜い〜 後拾遺集

都多き〜て〜悔〜き〜後〜の〜う〜ち〜を〜お〜と〜ら〜る〜を〜福〜に〜あ〜れ〜る〜

藤原光俊朝臣 現存六帖

角田川む〜い〜ま〜り〜今〜と〜い〜ふ〜を〜う〜き〜橋〜の〜あ〜る〜世〜に〜り

此〜う〜の〜康〜元〜年〜麻〜呂〜社〜と〜ま〜う〜て〜と〜ら〜る〜の〜角田川の

渡り紙〜れ〜い〜かの〜渡り今〜と〜浮橋をわ〜く〜た〜れ〜い

清譽法印 新後撰集

高きまのく世のあはれに川をのりて人の名をこころに

後二條院典侍 玉葉集

こころのあはれに川をのりて人の名をこころに

頓阿法印 草菴集

ささ川秋霧ふりて渡りやあやとこころのあはれに

中忠 歌枕名寄

思ひおくる人は恋へてささ川をのりて人の名をこころに

堯惠法師 北国紀行

浪の上れむらびとてささ川をのりて人の名をこころに

同

おのりて今を身うむ角多川河をのりて人の名をこころに

道興准后 田園雜記

古塚のこけりてささ川をのりて人の名をこころに

同

あはれに心多たよ思えは隅田河部をのりて人の名をこころに

同

思ひ人あはれをささ川をのりて人の名をこころに

同

秋のあはれに心多たよ思えは隅田河部をのりて人の名をこころに

平氏康 武蔵野紀行

都島とみたりてささ川をのりて人の名をこころに

廬崎

類字松葉歌林より総又これの漢と讀合する歌と駿河に載せ舟基法師の歌に下總に載と名取抄名寄載せと

萬葉集より廬前

勝地吐懷編より此歌を万葉集三より此廬崎といふとよりと駿河にある其の處に井蛙抄中よりいふと出より注云駿河國あり歌多しとあるれやしむと此角田川ありと名をそかきぬとよりありと有

按と云と駿河の廬崎も百年前風濤の衰して海に入り今たあり

江戸砂子より廬崎清地村とせ福島の事と云

再按江戸砂子より此廬崎といふ地名を駿河國の名不しとけを不知業内のもの角田川の和歌よりと云著せるもの於まつら山夕とえこれの歌に駿河のすも川あり名ありとおとくの歌をむとこれ隅田川なり駿河の歌よりとまつら山廬崎といふ名つけしものありんは清地村より此地名なき事必せり

駿河國志より廬崎又磯崎とも云廬崎の廬系崎の略刊よりと廬系の前漢と云

隅田川考より廬崎ハ中古より此所を是と名ありし

と色ゆれと四跡を傳へた加茂吉園の説く後の世に不
傳といふ村の名出来しよ〜と里人一同の志し
と〜いふ心か〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
紀伊國と〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
こゝは志す〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
高田まう〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
の湯田川ま〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
此歌も支那集〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
れ〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
ま〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜

柳とて毎基法師の教へたる傳の〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜

お〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
徳〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
傳の〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
の〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
あ〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
傳〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
片の歌伝〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜
〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜

土清門院御製 附集

〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜いふ心〜

源家長朝臣 支本集

しほりやうきしほりの橋枕とてしほりよきとてしほりよきとて

藤原為家卿

かひやうき又よきしほりしほりしほりしほりしほりしほりしほり

荒木田氏忠

夕されぬ惟思ふとや産所の自田河原に身を置かり

順徳院御製

今宵まじ惟思ふとてしほりしほりしほりしほりしほりしほりしほり

祝部尚長 新拾遺集

我為しほりしほりしほりしほりしほりしほりしほりしほりしほり

須田渡

松葉に下総名宗の杖類字名寄歌林載せと

支本集の云高國 下総を

又云源經業初居夕暮にすこの渡へもえ舟とて舟人よ

とよ夕暮きよゆかり此歌判者基俊云た舟渡を何より

と何れぬとてこのわたりとよみとて舟渡を何より

よ也是も業平初居いささしほりしほりしほりしほりしほりしほり

いとあまのわたりしほりしほりしほりしほりしほりしほりしほり

ていささしほりしほりしほりしほりしほりしほりしほりしほり

しほり云

吾妻鏡の云 須田小大夫 文治六年

東のうへに岡と云里あり長明道の祀に岡屋の邊より存た
みといふあり

江戸往古圖記に云岡屋村今此名あり岡屋里とて本母
寺うへに半田と云ぬと其志うへにの松二本ありと

或書に云岡屋里と云立郡半田業師の邊に岡屋乃
天神といふありけありけありと又むの里に今ま
た川の中にありとその記志に云

隅田川考に云岡屋の里も隅田川のやうなること
かたれとまうとくそのふらふ事と云は江戸古園とい
ひのに云隅田川より東の方より岡屋と云せしと又人の
いふも本母寺にやと云岡屋の里といふにや海舟のす

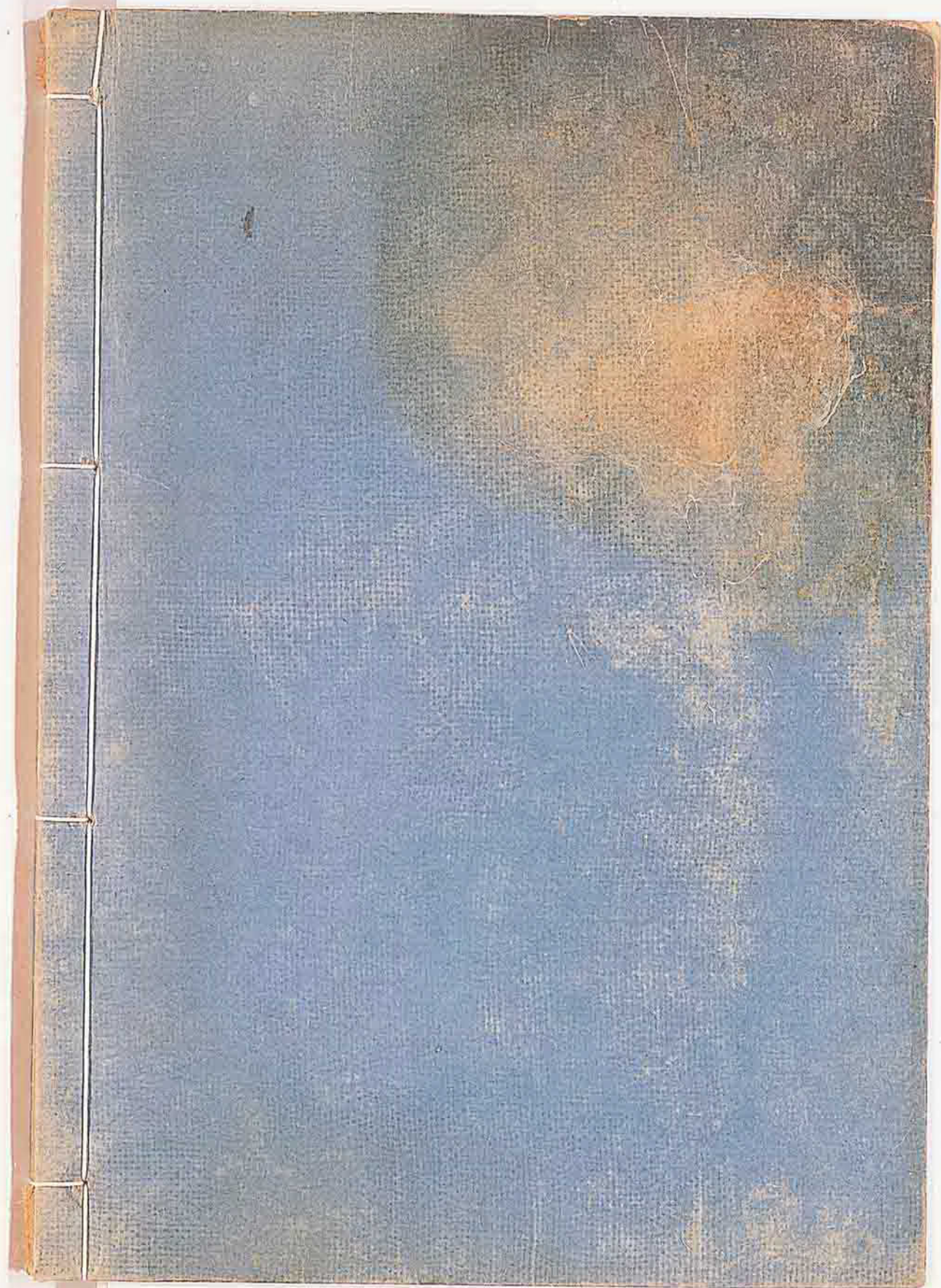
隅田川

とあるに日ち書ぬ岡屋の里と云やわかすし一井あり
と云書しと云康元二年九月角田川の渡りしとくこの
渡りの上の方に川のやうに流すく里のあるは舟ぬれ
岡屋の里と云は前と海舟も多くとありしと云云是
光俊郷考陸の國麻島の社にまうてこれに隅田川
の渡り越ゆへに時乃とあり是よりとあり
隅田川の渡りの上の方に岡屋の里ありといふに別々の
川のむらひの方なりと云はるる古園とのすは実
地といふものその所ありん今土人のいふ岡屋の里は往古
隅田川のうらに云里と云ふ所ありと云はるる
按と云く岡屋の里は今立郡半田と云ぬの祝儀屋

所謂園庭の天神ハ千住持の宿かふ〜と宿の高家
葉屋といふものにては田の中は板橋といふもの
下の方二戸才の宿とある是かり牛田ハ千住三丁
目分りして西光院といふ葉師の宿の無之地ハ
相近〜といふも同宿といふは終れといふ〜人の
園庭の里は〜といふ〜也

藤原光俊朝臣 歌枕名寄

右足立郡



武藏名所考

冬

L2903

→

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

武藏名所考卷四

晃嶠陳人編



堀兼井

名所抄に武蔵注に入間郡類字名寄松葉並に載と名
寄に堀兼井に作る歌林載せと

枕草紙に云井と云りこの井

八雲御抄に云りかねの井武蔵

丈木集に云りこの井武蔵

藤垣草に云堀兼井武蔵入間郡

義經記に云ありこの井と云りこの井と云りこの井と云り

あるてまを中將のなめりたるよのむとあひひて此
の國をわたりていふことあり

太平記に云源氏を絶つて討つて平家入多く亡むたれば此處
二度の合戦は打負つた地として今昔と云つていふは源氏に
續く事としていふに連日敵方の幾も馬あつた處といふ
一社の馬の息を休めく久米河に降と取つて明日とて行
つたれいふこと自れ未明ふも諸人押あつて時と信ふは
義貞遂に打負つて城を指して引退く

又云源氏を絶つて易南にたつていふことと願はくは野血よ
流してあつたは源氏の人馬汗を流して城の外の地も血となる
宗久孫日記に云今このことわざといふことあり此の又武義源氏

なりぬるといふ思ひの外に於て人乃後を馬の道と尋ねたり
一人は武義源氏のお昔を語り一人二人有といふ事をいふ
うまつていふ事をつひにたつて城の子はかまふとあつたり
いははまひの思ひあつたふらうといふり

圓國雜記に云城の井見たりといふり今この井
戸といふやせの里ちやといふははまひといふり
名取方角抄に云城兼井入間の辺所なり 多麻門の里
り下は載す

日光紀行の云山の端をわむつたは城の井は右にあり
續無名抄に云武義源氏りのこの井余サ二葉のといふ
江府よりいふりの學者一時儒學の師横川氏半融軒
に隨ひて安府府のやうに遊寄せし思ひ出く我

省れりけり安座府天徳寺に未申の如く何のれ後
園に在りぬ

志料に云場子の井八入間郡川越に在るゆゑ今俗
説江戸砂子にも牛込邊坂の志に在るといひぬそれ
より先此書にかくの如く志をせり一瞬軒八束那の人
ゆゑ志にぬもあつたりあるに麻布天徳寺の志に
存しぬと云へる人そそのいふる人そや云天徳寺
あつた麻布にあり

江戸砂子に云堀兼井牛込邊坂の婦りと里後と曰徒
母の後よりとくその父に井八入間郡中野の先より
て死よと名と云と云又多摩郡中野の先より

かひ乃井といふあり

按とるに今年に云堀兼井と云井二町ありひとら
争飯の下筑紫氏乃屋敷の賜に在りしに八箇士見
馬場久保氏の屋敷にあり

諸國里に後り云武蔵國入間郡堀金村に小高き山に
浅間宮の櫓に云々一窟ありふり堀金井の傍あり方
六尺より石段築いて井柵とて一丈八寸とて若むり
傍に碑有近き頃川越を此武士乃とこれを遠く也川
越より二里未申の方けありに堀兼井と稱する不遠
此系浅間堀のいと云也此より又六町南より二十間
よりから堀の如く窟ありこれをもその井に法也と云

又乙女新田盛志入間の里にもあり惣して此所を地を
うらと水とゆがく一伝く堀のひらりとひ里溜りくまた
と迷りたる之堀金の名かまきは堀金井とのひ残兼の
字と書しりの中との西伝うりたるあり

按とるに近江比達一とのひ寶永五年戊子此碑
かり其文は此凹形之地所謂堀兼井之蹟也恐久而
遂失其處因以石井欄置坳中削碑而建其傍併以
備後監里俗堀而難得水故云爾以兼通難未知只
從俗耳寶永戊子年三月朔と有秋元但馬守の建
し系と云

武藏野地名考よ云堀兼井入間郡の内より何越

城より三里とあり府中より又里と堀兼といふ里あり
堀兼と云事此不土地をさう故に二級にあり下き
一級と下りて井の深さサ尋とありよる武藏野
のうちたくと井深ありよ十尋なりとて水をほれ
早に急くと水必このりなり堀かひの井八むりより
して水たゆることあり

再按江戸砂子よ云堀のひは井正にあり赤坂清門の
うち岡部家やまきの内西に谷よあるとをりおね
の井と云中たり又近年怪しき一書ありと傍何
うしとの伝りの附此井と尋ぬ其人知事てんじ
をいぬと語明白よ志れたるおのむらとのすこと

まこと信しつゝ記ことあり

江戸志よ云堀兼井の説諸書よりあり或記よ
いふ河越のうら堀兼井の流と云ふ所ありまら流
同宮の下にあり成るもと云ふ事この俗よせんけん堀兼
と云ふの外二所ありけ下堀兼より戸なりかひとて
あり

按とるに河越のうらといふは誤と河越のうらと
いり戸ハ入首の誤あり

武蔵志料よ云堀兼の井も河越の南よて所入間郡と
言井戸ハともかよ満つとく多摩郡ありこの事疑し
むとらくハ今言井土といふこといふハ後人の書入あり

又高井土乃ほつとりよ入間村有れいなる

武蔵堀兼井事實よ云土人の口碑よ日本武尊東夷
征伐乃濟時武尊の水之く諸軍渴よ及なれハ武尊
民とく為よ井成堀しむるに牧笛不鳴と水を得
されハ龍神に余とて流を引しむる今是と不越年川
と云或ハ入間川のうらともいふ亮盛
碑と違たる事ありと載と

按とるに今云人年と云ふ川と稱とらば源と宮寺と云
より後ハ南入首村を經とく新河岸川よ入首
ことありある小流あり

武蔵志稿よ云入間郡南入谷村ホリカ子ノ井

按とるに谷の字ハ首の誤なり南入首村よ七曲あり

井と云ありこれをも堀子の井と今いひ傳ふ
後よあつらふと

三芳野名所舊跡記に云浅間社入間郡之内堀兼村に
在り社を慶安三年に松平伊豆守に遠立たり川越の
南二里余あり堀兼を堀金と書る非あり

又云堀兼井武蔵野古跡にも名なきに云此井は浅間
の社山の裾に方貳間ほどの凹の地其内の方を間と
いりの石の井あり半八土に埋り則堀兼の井は古
跡に又此を堀兼の井と稱する如多し此南六七丁
程ありて井跡あり又入舟村と云ふも七曲りの井と云
あり江戸四谷ありとも言井と云ふありと云ふは昔ハ

武蔵野方數百里の廣野に多く人家あり此浅間堀兼乃
井と云實の古跡なるべし

武蔵演路に云堀兼井堀兼村小き山に浅間大権現
宮あり少く宮は石の跡あり方六尺ありあり
石伐掌に井ありは堀兼に昔ありあり傍に

基の碑あり云俗に松平伊豆彦川越城主の頃建ら

るに云此碑室永成子建る云と云は
移封の後あり秋元但為建ると云は
誤り浅間宮の下にありあり堀兼の宮は勤王と

と云まことの變は是より二三町脇小言きありあり

今麓茅のそけり堀兼あり其石七曲りといふと云は
まことの古跡と後代に砂さんありありは云は後年

く〜と云ふといふ又浅間の宮も吾のまゝに井首は和歌で
深く水上より入るゑのぬる程凡廿尋と云り之丸を以て組
よと云り此外は村より二三箇所井首とを想して此處土
地言々してあを沼か〜と云つて堀のこゝろといふ里語よ
よ〜と云ふは誤述〜たる堀のの名水るれハ堀金井と
いふと兼の字誤書たりま〜と此誤述〜と云ふと或云堀
金ハ北野といふ地より北二里其二三町脇よ七曲といふ
堀井向り水涸主人の説よ古いつまの流ゆ於野中水長
是と穿よ深くあよあると七盤曲あると云ふと水涸
汲〜と云ふと傳ふ北野といふ地ハ川越城下ハ四里は南の
方と云

按と云ふ堀のの井を八間郡の名和と云ふ事藤原系は
〜と云ふこれと其地た〜と云ふれとこそ其四町と定るをひあ
〜と云ふ〜也余其地〜と云ふ〜これを探り〜ハ八間郡堀金
村北入る村北入るハ新田南入る村等とある上人七曲
の井戸と稱する古井ハ跡と知り〜き窟のあり不十四
箇所向り〜堀兼の四跡あり〜と云傳ふま〜ハあり
と昔時武藏野の中央〜と云ふ〜と云ふ平の地な
きは井を堀る〜と云ふ〜と云ふ水涸堀の〜と云ふ今も
ま〜と云ふ〜と云ふ〜人の〜と云ふ〜か〜ぬ〜と云ふ〜
〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜の〜と云ふ〜と云ふ〜
〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜
〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜と云ふ〜

その形さうせきなく窟うよのこ深きうその十四箇
家と堀金村と七ヶ所北入芳村と三ヶ所北入芳新田
二ヶ所南入芳村と二ヶ所堀金村の七ヶ所一ヶ所浅間
の社の傍と一ヶ所二ヶ所小名原と一ヶ所道のやうよ
下和云う六小名原と下と一ヶ所度孫右衛門といふもの家
の裏と二ヶ所和興八といふもの屋敷と一ヶ所仁右衛門と
いふものいふと堀の中は二ヶ所あり一ヶ所今堀といふ北
入芳村の二ヶ所一ヶ所小名原橋場といふ所の観音堂のう
しろと二ヶ所 逆きう一此并沢邊のりた文保三年寛正三年の碑をゆり
今観音堂といふにけふの豊島八堀兼の井八さうく
とあり 二ヶ所は小名原のせうといふものと二ヶ所六ヶ所
といふもの家の前と一ヶ所河り北入芳新田乃二ヶ所

一ヶ所森を湯といふもの地と一ヶ所二ヶ所とこのほくら
の畑中によりと比兵尾井戸と標とるもの一ヶ所南入
芳村の二ヶ所一ヶ所金剛院といふ寺北裏門乃外り
下和云う二ヶ所市を湯といふもの家の前と一ヶ所あり
土人堀兼村のと除きと入芳の七ヶ所井戸と一ヶ所
其外と又堀兼村の内小名原と下たふを湯といふもの
家の前とある俗ふかんく井戸と標とるもの此井と六
水とありと七曲の類とあるねと古井と一ヶ所
又堀兼村下奥富村青柳村も古井井乃並あれとこれ
らうを水なりと一ヶ所又四ヶ所堀金村浅間の社乃
傍と一ヶ所河りて家の堀の井ありんと一ヶ所と此六

新田地うへへ村を塚金と名付けハ遠くぬ世乃
事と土人をいふ村名をかたむく実海と定むるも
此を来たうくや土人のいのかうり紙書くらむりハ今の
浅間の社の名に傳き古井の記あり一人のから入ん
る事と伝をきくいつの頃つこれを埋め土城言くゆり
あけそのよと浅間の神をまつまうり今石の井けを
はくうりいふと古跡伝うりいふとあり新ふ
りりいふとまき諸國里人後三芳野田跡記と浅
間より五六七町南と井の記ありと載るはより
いふ山名基といふ所のゆり之に戸志といふけ下あり
いふといふ事す外ら孫吉兼門與八仁宿兼門等の

井のゆり之の事ありといふ事とあり北入芳親着
書のうへへ記に在る井のゆりすといふけあり地言く
して水を伝かされといふ方も井をこれ場のゆり
宗久藤日記と場のゆりの井ありかといふあり
いふ事とあり今そのいふ所の十餘の蹟伝て
これをよとよといふ事といふありと互に事とあり
いふ事とありの井は堰といふ事といふ事あり
逸の井ありといふ事これほりかといふ事とあり
舟と事といふ事とあり波舟の機もいふ事とあり
いふ事とあり坊機をいふ事とあり本所のなるとあり
いふ事のいふ事とあり山通を傳伝いふ事とあり

へきふく多々かり今たましく一不之限り棧の古
蹟と傳ふるあり又太平記之堀金に作りしこれハむ
のけ付地よりこが孫を堀のせむるよりの名あつんと
いふ人あり金沢ほりこるより惣りり一名あつは金
堀とやいつ毎に綿織徳積鳥取たしとゆるは和語
ちのこかくの如し一用代先りしと體を後之抄に
唐語之限るありこの古歌にも堀のほく水あき
心こよめふよそこのの事ハ何らさる流と今人し

大伴家持卿 家集

伊勢 家集

むさくたるほりかねの井汲きてこれ日之暑さあたえぬる毛

同 秋枕名寄

紀貫之 家集

源俊賴朝臣 家集

西行法師 家集

藤原俊成卿 千載集

いそかく思ふ心あほほりこの井よりも物を流さすさきほ

武彦の堀兼乃井の底と流と思ふ心代何よりあつと井

こあつとねのひこ井やれ武彦野のほりかねの井はけりし力を

あさかるとおのぼりはこそ六ほのめせりかねの井はけりし力を

汲くしほ人もあつとんあつと堀兼乃井乃底はこころ代

武彦のけりこのおのぼり井も有のさうれく水はちのきこよけ

慈鎮和尚拾玉集

今ハわき浅きころを忘れ水いりなり乃井作らるらん

後之我太政大臣

源通光公
秋枕名寄

ほりのわきあはれきくむしつ井のれきとな井波のしと平

冷泉太政大臣

藤原公相云
史本集

むきし井也堀兼乃井の深くのと深くを増すよもの夏草

堯憲法師 北園紀行

井とて深く聖のあまのくむきと深のほりむし井の深かむと

道興准后 田園雜記

井をかふるよ深きむきし井なりむねの井に水をなれ也

同

昔たれむきくくの名然とあく水也と野とをほりかひのおそ

逝水

松葉に載せ名寄に未勘の部よ裁と名取抄類字歌林裁せり
史本集よ云むけの武彦

諸國里人後よ云逝水武彦野よ在まきとれ水よあは武
彦野の深置の事をもくくしきとくくらかある甚の定よ
地名きてこまこよりいんれとまれき事武彦とるく水乃流
るぬくよえゆかこの水よありこれハそのけりて又向
よ流るぬくれ氣ありいしむよてもその水武彦定めとれ
りて先之れと逝水くやうなるあよかく名付てり甚より

其のけく有り秋をむかす

武蔵野地名考よ云按よむさうはよ迹ありと云地名あり
堀桑村のありりよ年とて川と云細き流あり其分れ
敷をきつめとくあのがるきさる川也奇異のり之移とも是
を迹水といふも便なりや或人の白露雨の頃武蔵野
をゆく野守をゆけといふともあく水ありれと草根をれ
よけく野守をゆけといふともあく水ありれと草根をれ
沿のこくこく此時往及の人定るるぬ道哉こくこくあや
さゆよひあふたかこくと吟ひわさむさうの今れこれ
るこくこくて年の八九月霖よきとくハ必あるるあり人
の曰これあん迹ありと云へきれ古ありよもむさう此の事と

これよゆくあれ迹かきまてもとあれとこの名と事と相
符とるもや

武蔵遊草よ云迹ありのりハ古老傳人いひく其の頃小
川新田といふ所の一本榎といふありりより野白天王社の
色あるハ武蔵野地蔵といふ色まきありしよとあれとを
今も民家こくこくを伝まきりて武蔵野の傳ありゆき
迹あり絶こり

按とるに旧説或を陽炎とく或を行潦といふと
と毛源俊頼頼臣の迹かこれとも世説よと云はつあ
りる事と於て切なりとさるる如く物ありと本則多
摩川のなりり土地墳起せる所とては水地中より

穀里よりと涌出るもの有豊高郡石神井村三寶寺
池多摩郡井草村善福寺池牟礼村井沼池等とこれ
多摩川の伏流なるんと言説あり義濃國醒井の亦
毛若老の湧れ伏流之といひ西土齊州酌突泉之水
阿達とかうやうれきありなりと守へるに逃かす所と
いふ歌と於てハ伏流と守ることを獲るゝ久余此説を
得て後三芳野名所舊跡記とよみしに三説と得
たりてハ武彦時之逃る水と非と曠たる系龍に
水如こより見れば其末の水の流るゝ如くこゝに
其水よりと見れば水あり又其向れたるの如くこれハ
り程是之逃りやうある故と逃ると名と呼ひし也

二つは水野村と云ふ所の郷深水野忠助と云ふの居る
處に山川有藪の中は流き入り地中と志と逃る流
の末あり是は逃水といふ二つは宮寺郷と云ふ所の
年とては川と云ふ有畑の方より涌出る川に成り夏
の大雨とて出水の前ハ怪我人孫あり毎年大晦日
至りて水流る事なりと第一説といふ多野村ハ入
間郡山田庄川越領とて堀金村と隣る余は極く
忠助の家といひてり見るとかの説のこゝに小川あり深
これハ宮寺郷のなりよりせりなりとて事二里
許之今も藪ハなく川の本堀切とありてはゆその
又六間より上鏈の事と折るは多野とハ潺湲言

流るるにと堀切の石とあるに水とありと其の流を
去るとその源紙句と僅と二三尺餘とありとといふ
とあるに余の記と類せり去り去るとも余の記ハ推量
ありと此の時村ハその院現とありと遊水ハこれに
こそ定むべきと是より其村ハいと新田地とて人
家も多しと一紙忠助の先祖あるものけりめと聞
きくとあり

源後頼朝臣家集

東路ふありといふ所もあけあけ途かられても世にふるも成

入間里

名寄松葉と載と名寄ハ入間郡寄里也有郡寄故可尋之
と云名不抄類字歌林載せと
續日本紀と云稱徳天皇神護景雲二年秋七月壬午武蔵
國入間郡人正六位上勲五等物部直廣成等六人賜姓入
間宿禰

拾芥抄姓尸錄部宿禰の下に入間あり

延喜式と云武蔵國入間

和名抄と云武蔵國入間 伊留未

吾妻鏡と云建久四年三月於武蔵國入間野有追鳥狩

名不方角抄と云入間里小川有世俗と入間の宿といふ郡
の名あり 方角抄の下のよみよりの
里不田の里と改せり

南向茶話云川越の城内にも業平の社を奉りてといふ
是も入間の里に居住の故あり

武野志料云入間里に於てあり入間郡をむらうとていふ
入間の郷に和号云々云々云々此の類ひは多く

按と云ふ今入間郡に入間川村あり河越の西南二里
餘に在土人の説とむらう入間里といひ中頃入間村
と傳ふ村中に天神社ありむらう在る業平朝臣は
社の西とて号とよまれりともり業平天社と稱はと
あん志云々云々此の社に菅社云々云々業平朝臣の靈
をいふは是れ也云々云々

又齋藤敬天いふ入間川を近世むらう川とて名を

得る地ありといふ人の入間里と別あり河越より
南とあり入間村と南北二村とわかれり大村あり
間と号と号體相似く誤書し奉りてやこれを
まじうく古の入間里なる人々余考るに俗間の文書
に片假名りて送り紙施の事多く入字の下にリ
ルを添書せり此紙より後に入間とありけん
おのり又射魔とて書るるといふと奇談好くあり
字を楷せりまをあれを案るに是れ況の極令の
類とてこれと唐語とて古に邦語と述ぶ

藤原俊成郷 藤原

さりとてやたのむれ居候とていふゆに乃里にきよをいぬる

雲わくれむのの末を交るのいふまの里やゆふた乃と

附 入間河

北條九代記に云 堀越次親家より藤田光澄武蔵國
入間河より河へゆくも清水冠者氏討

又云相模入道櫻田治部少輔貞國より六万餘騎とて
入間河へ向はる

太平記に云武務國小寺原京より打原給ふ云云軍八咽日
と約談して入間河に陣取るとる藤倉勢も三里引退と
久米河に陣をとる取らりともふ兩陣相志る其間とて渡せ六

三十餘町よたるとりけり

神明鏡に云文和三年七月廿八日基氏畠山國清武州入
間川津發向

北國紀行に云入間乃舟渡り

回國雜記に云これより入間川はありと云云此河ははきとて
さゆくの流あり水逆よりあるは流るといふ一義も傳りま
里人の家乃内より流る侍るといふ水のあつる方角也内流
とてこれハ何方流かま下と傳りあかす一家これに誠は
あそ傳るといふとすかすは云々云々もこのさるなるあ
と毛也其形なる風情とて傳り

武蔵志料に云此河の上は今川越より小川へ流る

少子流を幸さく川といふ有すはあらはれぬ多
摩郡と入間郡との界川のやうに後谷戸といふ村有
是すこのものより今村多摩郡に在

武蔵野地名考よ云入間川これ又野中にある西六つぬ
根より流れぬ荒川は落るよと云ふ又と云ふ川といふ凡
周流と云ふこと武拾四五里あり今も又入間河と云里あり十
里あり江戸は到古跡あり義貞朝臣この河岸に陣し
ゆふとを旧跡あり足利基氏朝臣も此所に住し東國氏
流しゆふと云ふ人といふことさういふも此の通りあり

按とらよ入間川を秋父子此指沢の南の谷より出雲
郡落合村と多摩郡北小本宮村より出る川といふ
一流と會し言羅入間の間をあら入間郡といふ押邊
川といふ比企入間二郡の間流なれ荒川といふ流
いふあり北國紀行角田川を志する所は利根入間の
おらりつるにあは荒川といふ川とせらるるまことあや
まりたるとをあらと云ふ

田能武澤

松葉小載と名所抄類字名寄歌林載せず

八雲所抄よ云多のむの沢強河といふのめりといふは傳勢物
語よ武彦なり

按とらよ田能武澤といふ入間川村天神社あり

埜の川と流る下流の示す所らむの川のありと今も土人のいひ傳ふ

攝政太政大臣 藤原良經公
新古今集

意る多し多のむれは成る房もいふとあり風の秋はゆきれ

藤原有家卿 史本集

秋の厚風よきむむと秋路より誰とたのむ乃はたゆらん

田能武里

松葉ふ載と名所抄類字名寄歌林載せと

史本集よ云たのむの里武翁 藤原

按とらと田能武里と上たりる入田里此別條ありと

土人らりりされと史本松葉たきむむとくこれと
ことこのの

源俊平綱臣史本集

今あんと秋とたのむの里今まのむありやと川厚乃登

三芳野

名所抄大和武藏二所と及又所吉野里大和一説武翁と

載と類字名寄松葉並ふ載と歌林載せ及

八雲所抄よ云見吉野の里武藏

史本集よ云とくあり里大和又武翁

伴勢物語よ云とくありとてわたり此國まてまむありと

亦云云任と云ふ所なりける郡みよけり里なりける
真名存勢物語云武藏國入間郡三芳野郷有流
北條五代記云其のち河越の城と再無一氏網在城
のぬ此城を崩定公先祖の家老太田道基といふもの
初めく城と云ふ是と聞くと入間郡三吉野の里と云ふ在又
中将のありやと云ふ一三吉野の田面の存と云ふは云々
日光紀行云河越城中も名も其のみよけり里ありきり
紫一本云云三吉野足立郡の内上吉野中吉野下吉野といふ
阿り是と三吉野といふ古奇みよけり田面の存もひこ
ふるよ君のかつと云ふと云ふ此奇存勢物語の古書
入間郡三吉野の里とあり

武蔵志料云今紫に上中下有あり云三吉野といふ
一三河といふた云三越路といふや三越路中越後
の三越を合せと云ふこと思ふ六傳事云三ハ其
乃意と云く大和の吉野と云ふ一野といひま三越野も
三越野といふ是も三山と云ふなり六河といふその外
三谷三山の越ひまかすといふた同く貴族の領と
されハ三越野といふま野といふと云く知る

武蔵野地名考云三吉野の里入間郡のちりなり云六河
越と總名と云ふもの法も此なりあり云々今同く
武蔵志料云武蔵人云三吉野の里今の河越城の西と云ハ
今の城より八一里なりと云ふといふり土民傳人云毎年八月

十三日一必と厚の写と同とを武蔵の厚と此所集といふ
三芳野名不舊跡記といふ川越城入間郡山田庄三芳野乃
里と在

武蔵演路といふ三吉聖天神靈社川越城内落産三吉
聖とある大まに江戸町の多岐いふと上中下有と一在亦
業平の満居の和といふはいつ

按とあるにいふ一三よりの軍といひ一八今も三吉野郷と
いふうらぬと一武蔵國村付といふ三吉野郷二十村川越郡
河原上下新河原砂村南田島牛子駒林橋瀬苗圃
福園鶴馬寺尾友倉宗園計ヶ谷水子今福青柳北
入芳かり川越町と今山田庄に属して郷名ありこれ

もむうハ三吉野郷とあり一紙後小郷名とあり一あり
と今考がし

在原業平朝臣 續後拾遺集

わのむとよるとなくあるみよりのむ乃厚紙といふのむとねん

ナニ人志ら後 伊勢物語

みよ一聖れたのむの厚もむとあり君のかとよとよるとあり

後京極攝政 藤原良経公 月清集

とよ一聖の里ハあり一秋の聖にたまはつこのむ乃とあり

藤原有家卿 千五百番秋合

みよ一聖のたのむとよとあり秋のむとあり

藤原雅経卿

みづきやたのきし原の藤すかり花よ名残乃とほれ曙
定範法印 丈木集

かきまひのさきしりの里かまへきのむれ原の松志のふらん
藤原知家郷 家集

りまいたのむの原のむれ原わよれさきよみよしけのれと
源具親朝臣 新續古今集

をりまはれたのむれ原のわれさき花散ころれさきよしのさき
藤原忠良郷 千五百番歌合

えようけく月をたのむれ原合やたさきとまよるとまらん
藤原為守郷 千首

わの方ふよると思ひてさきよしの田面乃月よかふるわりのね

慶運法印 新續古今集

たのむよりのさきよしけのたのむの原乃まれわの程を

堯惠法師 北國紀行

春を今このよきとむさきとむさきけや霞む山をたみよしけの里

附河越

道興准后 田圃雜記

かきりたれさきよしけの武蔵野の境を志る武河越乃里

浅葉野

名寄の載と又信濃とあり松葉歌林載せり名寄抄類字に浅
羽野信濃又名寄の浅葉野と載とといふ武蔵野

武彦野原の例として別にこれとある

萬葉集の云浅葉野

拾穂抄の浅葉野信濃或は武彦と代匠記の浅葉野
志志のよあるより第十二の阿まを野よたるは小
波と讀りといひ

和名抄の云入間郡麻羽安佐波

史本集の云あまの武藏

吾妻鏡の云浅羽庄司治承五年

又云浅羽五郎行長文治五年

又云浅羽小三郎浅羽三郎文治六年

又云浅羽庄司三郎建久六年

又云浅羽次郎兵衛尉建長二年

又云浅羽左衛門尉次郎建長三年

武藏七堂系圖の云兒玉黨浅羽小大夫行業

武藏志料の云浅羽野或書の云信濃又ハ武彦と有武彦
の阿ま事未考

武藏國村付の云入間郡浅羽庄川越領下浅羽村

又云入間郡浅間本郷上浅羽村

又云浅羽庄入西領北浅羽村

按とるに浅葉麻羽浅羽文字異れとも例の音外りた
信濃の阿まのものと相混して無かろともれも今も
入間郡上浅羽村の田の中といふ人何れ此城跡とて

稲荷の小社あり此邊淺羽郡といひ〜と土人の語り
名抄信濃國郡名の下に淺羽あり〜と本郡と淺羽と
載されハ美事なよめふちこの淺茅野と云ふ人な

柿本人麻呂卿 萬葉集

あさと世に立こわ〜けぬが〜たきゆゑよふわの〜ひん
よき人〜ら

これ等の淺茅野野らに於る茅のほあひ〜りれや〜すれ

源俊賴朝臣 歌枕名寄

君はこそあさと方 原小社つゝ志のり〜もあもふ〜思

式子内親王家集

わの神のり〜ひりや〜れあのおさ〜野らよか〜夕霧

藤原家隆卿 續後撰集

これ等の淺茅野野らのあは〜れ〜神と人れ〜めそ

同 秋枕名寄

あさと人の子あさと野ら〜の〜け福と〜らめや

藤原公純光卿 夫木集

春の淺茅野の〜よりの〜雪も〜及んゆるさ〜ひ

源家長朝臣

紅乃淺茅の〜れ茅も本をま〜と〜初 晴雨の〜好

常盤井入道太政大臣 藤原實成公 續後拾遺集

〜まゐれ〜れ野らよ〜く霧の色よ〜て〜ぬ神のれ

後之我太政大臣 源通光公 秋枕名寄

齋雨もぬりぬりけり河をせりよの川をけりよの川をけり

藤原為家郷 史本集

河をせりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

同

あさき野のあけけりまけおそくがれてあけけりよの川を

藤原為藤郷 後後撰集

夕ふれいけりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

藤原経道郷 史本集

まきのの川をけりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

堯惠法師 山園紀行

まきのの川をけりよの川をけりよの川をけりよの川をけり

大屋原

名寄松葉よ哉と名不抄類字教林載をす

萬葉集よ云於保屋我波良

武彦志料よ云萬葉に伊利麻治能於保屋我波良と云

とれとれりら入間郡の河川の河あり文字詳あり

そこの大野のありやともいふ事といふつら水多きれ河

系なりとはありし和名扱よ入間郡のうち大家於保乃郷

ありその河の國雜記よ河越常樂寺といふ時宗此道場

侍る日中の勅聽聞のよめたりとふ道よ大井川といふ

河をよめる打屋と大井河系の水よ山や河のよれ名を

やとらんと云此あるべし

武彦濱路よ云大原我原入間郡大家郷今大在家村有
大谷郷といふ一或豊島郡板橋郷

又云山條分根根板橋内大谷郷といふ由大谷郷系八板橋集鴨
の間今庚申郷のこころ代り又大井郷といふ

北川一善云大原系八足立郡之足立郡の内南村と云南の
限より東八領家村西八大谷本郷村上尾と桶川へわたりと大
谷領と云是大谷系也

橋より系系集之於保登我波良とよめるハ大原系
よりして河系の義より河にあり今入間郡之大谷村あり
村より十條町山之わりと系河り地原の系といひ傳ふ俗

しと云地原やの系と云入間江頃までと云とらかりに
今も松平と多く極く東へせまりこれと松十條町
河と云これやわら地よりして赤城日光筑波の徳山と云て
極て勝景の地と云れりちと云河の沼といひて十間と武間
と云りの池又大亀の沼とてあふりり此池あり中島と
系財天の社有り蓴菜多く鯉多と産とれと毎天の
池をれとととと人これ取捕らば系系といふおつと河
よりと云る此池より生ける藺かきと云大谷村八方二十町
と云り何る大村と云く堀江庄のうらと云る島郡足立郡と
と云大谷系ありといふ説ありと系系たまはと云く
伊利麻治能於保登我原と云る其説の非ある事

論より紙待次

よまへくしん 萬葉集

唯明法師 文木集

此の海に於てやうくくいのどおほらひぬくくわよあまを
日のくれよ大空のくくくわあゆけとさうもまきくよくひなま
右入間郡

碕玉津

名取抄名寄松葉並に載と名取抄より碕玉津より作る
浪よ碕玉津とあり類字歌林載せと
萬葉集より佐吉多萬又前玉

拾穂抄より碕玉津武藏之

八雲津抄より云と云と云の付 國多と
志多と

文木集より云と云と云の付武藏

藤原集より云碕玉津武藏碕玉津

紫一本よ云と云の碕古歌あり碕玉の郡ハ岩付の今城ある
所と是立郡乃ち大門といふ所より岩付ハ道み不自沼と
いづく七里續くるといふ大池あり此池よ付く碕玉の碕と云
きの池多と云を有くやま又利根川よつきその名有く碕玉
の郡より海を遠く

武藏野地名考より云碕玉は碕玉郡乃内たりを云未詳
萬葉集にみえたり

武蔵志料に云持玉郡の津を利根川なるる魚一
北川一善云津玉郡に津玉村あり村の南に三町ありといふ
不似ゆけとさい西の津といふ

按さるに津玉津は此東の津といふことなる如くさぬま池
の亦ある一利根川より流るる一山にさくたりん
きと此池に付とささの池有と云といふ事難あらん
その西に津の名あるところは池と稱せしる事難あらん
少津池は是處なる事明く之又利根川に流れて乃
名也といふ説もさるる池にからんして利根川の
津をきくとした津玉津とさるる事や又津玉の郡より海に
遠くといふる海なくして津の名ある所なくともなる事

唐のれとも津といふ海との事なくして近江に津津
海津ありと云く事なく一そのかきみぬまの水利根川と
通一諸國運送の船こふ磯城ゆけ津玉の津といふ
らん古今の變遷臆とりのくさるのりかき

よもく一らん 萬葉集

さるる津といふ船に風吹いてはあつたゆもことれたえそぬ

小崎池

名和抄名寄松葉並に載と名不抄の注に武蔵持玉郡
とあり類字類林載せず

萬葉集よも見武蔵小崎沼鴨作

拾穂抄に云見安に云武藏國名不之埼玉郡に在代匠
記に云た玉の埼玉郡に云武藏廿四郡の内あり

八雲傳抄に云と云たの池武藏

文木集に云小崎の池武藏

藤垣草に云小崎沼武藏

武藏地名考に云小崎池荏原郡に屬し其不未詳

武藏志料に云小崎池埼玉郡於尾崎村忍城の裏に在阿

部豊後守碑石に云と云

按に云忍城の邊に尾崎村と云あり一碑石に云と云

一八埼玉村ありと云に武藏小崎沼右所名稱武藏小

崎沼即是也所者證以萬葉和歌集矣自寛平五年癸

丑歲至今為八百六十九年蓋可知其古矣此地紛紜

茲蔚中而既為隱其所夫豈可不惜邪於是勒其地名

於石以為不絕不朽云 此下は系集の歌二首を
のを今もなげつと云 寶曆三年

癸酉歲九月望武忍城主阿部正因建臣文國平岩知雄

書に云

武藏郡村記に云埼玉郡尾崎村

埼玉郡誌に云小崎沼忍の城より東北にそ沼のなりは埼玉

玉村小計村あり

按に云忍城の東北に云るを誤なり城よりを東北に

阿部正因と云

又云小崎沼を今沼縁新田と成中程大なる沼なり菰蓮

菖杜若多く新鯉鰻鯉任りされとも海のうら冬は多
多くとく豊敷の逢ふ碑も野田の末清水漏田の縁
松中と有く寂くたる所なり

梅と多に諸書と崎玉村とある池代りく山崎の池と
されと本郡釣上村の面山と尾が崎村といふあり
この郡の池沼多き地を八毛とくもけりうとむじ
池ありく山崎の池と稱せしとやさきまの山崎の池と
いふ代りく崎玉村の池をたたらこれとありする説也
よとくくら及 弟集

藤原為尹郷千首

されされとまのいけと鴨とてぬきおのりたを我とて物也

山崎の尾とたの池は秋の月とてや後代のけくまひとて

平時親 夫木集

水鳥のやとたの池乃水とてうた新うらう後かまらむ

右崎玉郡

岡邊原

名寄松葉と載と名不抄類字歌林載せと

夫木集よとてとのとて武彦

吾妻鏡よと岳邊六野太忠澄 文治五年

又云岳部平六岳部右馬允岡部六野太岡部小三郎 文治六年

又云岡部右馬允 建久六年

又云岡邊左衛門四郎 文曆二年

回國雜記云岡部の系といふ所をわたりて孫とといひ
ののぬれ回れり近代関東の合戦に数万の軍兵討死
の在りて人馬の骨骸をて塚に集りて今も古墳あり
まごゆり

名取方角抄云岡部原 向岡の下

木曾路記云岡部の系名取之古教省岡部六孫右忠澄
舊宅あり駿河の岡部云六孫右宅有りといふ古虚記之
武蔵郡村記云榛澤郡岡部村

按云云岡邊岡部字異なれと同處より回國雜記
以下の記皆從ふ

曾孫好忠 家集

むきくはさとの系の新藤も花さく時よりありたりと
道真准后 回國雜記

る記をよむとの系の新藤も花さく時よりありたりと
右榛澤郡

武蔵嶺

名寄松葉に載と名取松類字歌林載也

藤原草云武蔵小嶺武蔵

部の記云云ちぬ山との山より年久しくはまかつた
はとありてぬる山ありたりて村乃人むきを借ると

からけい言ともやほれの西れいひる人ともさうの志くわむ
木曾路記よ云秩父山を武蔵新峯と云ふ山也江戸の權
ちもよりみゆる江戸より峠れ方よりた
名所方角抄よ云秩父山の嶽を西のくくあり山守りんえ
たりると云名所あり武蔵根といふも此秩父山をみくりに
富士とるみえとあり

國名風土記よ云武蔵國當國秩父嵩其勢鎧武者怒
立躰也依之此國之人心武也日本武尊東夷追罰之為
下給時彼嵩詣御覽吾朝人心武事此嵩故也仍吾凶徒
從大將軍然為御祈禱所持之給鳥兵具彼妙嶮大井御
嵩納埋置鳥彼武具岩藏籠故号曰武蔵又武具指置仰

有鳥故云介

江戸名取話よ云此國の中に秩父り嵩とてきた山あり
その山のさ海むとよは澄武者のたよ怒つとくまてあり如
され八人皇十二代景行天皇此所宇に日本武尊を東夷と然
めんこの為よけ國よりのみひの岩れんくき坂んのみ此山
のいさうひより此國の人の心り猛きことと餘國よ捕れ
たるもこととありと志ろくめ一衆今大將軍とくく
東夷の王金よそむく代責志とく人んう為よわたり頼つく
此嵩の神我軍を守りてとく自らり所持の武具と嵩
のよとる岩花よこのく山神と名ありあり
武蔵志料よ云秩父峯武甲山武蔵嶺古くちよねと

いふ所今武甲山と相傳ふ日本武尊北東美と討平
たすひて甲斐國の山よとあるひより武甲山といふと
いふこと攝津國の武庫山の事は同一とれとことと
中々年古也未とこといふ事古人のかゝるありて別
きとく字の音乃まいたいことと心えぬことには是
考も有る事と

武藏演路と云むと根多磨郡

按とるに武藏岩と稱するもの程とて一野の如く
これとてかまひりしるるありとされも方角按と秩
父山とせる程あまを替これと後と

よと人〜ら及 系系集

むら〜ぬのよとぬと〜〜志の春のあまを〜あまの

右秩父郡

蝦手山

名寄松葉と載と名寄と云は字未詳名不抄類字歌林
載せ及

藤塩草と云蝦手山むら〜

按とる小蝦手山其正詳な〜及

よと人志〜及 歌枕名寄

名不とて好やま〜いあるとまたこれの註のあまを〜みら〜り

海比

名寄松葉に載と名不執類字教林載す

萬葉集よと宇奈比

仙覺抄よあつそひくそ其の岸也岸と春夏秋冬
かろよ夏のをといひ其をむくとみてはかあそひつ
けりそれと麻の扱ひとさうとさうといふなり岸
あかりとのらうと皮とさうすはる扱ひくといふなり又麻
をら根ぬくひくなり古今にもはくさうあされと乃
志多事とよあり岸圖をさうといひはひのりなり又
いふれ岸とよそとよある心ありとさうのみかこは
うへ扱ひける儀あり女の傍ありやる老女なりと

とよいをさうかそといふなり一河と岸扱ひさうい老女
のこのみよ仙とれとあつそひくさうあつそかこれ扱ひはすれと
よそとあり一このうあつそは上總國よなりとのけり上
總國よいさ^{ウチカタカナカニ}と海北海南といふあり此海上の都あり
と中ノ岸陸の鹿あり崎よとさうとさうとさうとさう
ありなれと何と海のなりと上總の國あり今乃岸よ
よめさうかろとよとありとさうと一又類林にさういふ
の名候とさうと海と扱ひさういとも留とれは海邊の處
女壯士とありと一は海とさうありと一かつこの男とらぬ
とさうと海のめは男とさうと男とよありと女のよ名
をよとれいといふとれとせよとわさうとさうと海邊と

越よかりとよめりととて
加藤千蔭云契沖うかひハきく海色とて六世奇武
箱と定之きなうぬる海方いといふ地名あるといふ
さうらひをいふ

藤塩草と云うかひ武蔵

按とまら海比其和洋あり

よき人といふは葛葉集

かひをひくうねいをきくといふはこれいふ人といふはあり

原田里

名寄松葉に載と名不抄類字秋林載と

名不方角抄と云原田の里 入るの里の
に附す

按とまらと原田の里と本集にその西紙脱と方角抄と
入間の里のりと附とこれと愚図ととの系紙向圖と附
たるよ例せざる必しもおらざる地ともおらざるゆゑ
郡来勘のり六入まぬ

源伸正 丈本集

あひの地のとらた乃里とたりの水ひきつまうと書と

猪名川

松葉に載と名不抄秋林と摺津とあり類字名寄載と
葛葉集と云猪名川

代通記よま猪名川とよめる八津の由よ伝ふる人あり
ありあるあり

八雲所抄よま井太河 撰津

藻漁草よまいふ川武州

按よまよ猪名川藻漁草よま撰りて收むといふも
其の詳あり

よま人しらば 斎藤集

かくのよま有るよ抄哉舟ふ川の字を添めてわの思ふける

大我井杜

松葉よ載と名よ抄類字教林載せ

按よまに大我井杜其の詳あり

藤原光俊朝臣 史本集

紅葉よまらたのの杜乃夕とて又たの歌山の端あり

詞書よ此等ら武夜野成るけるよまよとてやよは
見え及して抄ののの香とらありとらうこつふ
おまよ見えけるありよま

阿賀須沼

松葉に載と名抄類字名寄教林載せ

八雲所抄よま阿の沼世本よあり
らに作る

藻漁草よま阿の沼武州

按とらに播磨郡と河野郡村あり又高峯郡と河野
村ありこれに沿河りむのへぬるき沿まあり此
あり今故つゝ一嘆る頃を佳系ととり名乃
おちるれハ志をく考ことあ人のこ

慈鎮和尚拾五集

年と経く引人絶及このや河の沿よ生は河や免を

古江浦

名不抄類字松葉よ未勘國と名寄秋林哉せと
交本集よ云ぬるえのうら武彦
藤塩草よ云古江浦未勘

武蔵志料よ云或云当園又云哉中梅とらよ古江村哉
中にあり系系十七蓋鴨のよと古江と云名寄名
あり何れ新拾遺集五月雨の古江の村いたこの浦とよ
と名寄とら又拾遺集よ古江の名とよと云哉中
當園よあり

按とらに古江浦交本集と拾りて收むといと其
所詳あり

遍昭僧正 風雅集

系代乃よ子張かして勢の位古江のうらと松よ本名哉

よと人よとら以交本集

何れよのふるこの浦よありはるふありとやん人旅の哉

岩瀬渡

名不抄類字歌林並に載せしと名寄松葉に能登と載す
武苑志料と云或書と云武苑かり未詳

又云今樓と云一盤岩瀬渡森野川と云に大和國高市郡也
いとせ川の古歌よか〜後頼朝も有日本紀景行紀十
八年筑紫國巡狩の時是時於石瀬川人衆聚集と有
筑前に於武苑と云抄及といふ〜

樓と云と岩瀬渡志料或書紙引と云と授りて收む
といふともその不詳あり候

よと人〜ら及 丈本集

阿手と云に雪落つらる舟と云て渡りかたをいふとせたり

同

風を〜と云と岩瀬の渡と云をの舟待りてをとりな候

宮崎山

名不抄類字名寄松葉歌林並に載せす

丈本集と云とやと云と山武苑

樓と云と宮崎山丈本集と授りて收むといふと其
不詳あり候

中勢郷親王 丈本集

池ありはと云とつらと云と山風と云と雪と云とあり候

加茂重敏

舟とむら岩せのこころはるめてまはらぬ山吹の月かけ

藤原基廣

五月雨をいそせの渡浪こゝろをさき山よ雲をかき家

霞崎

名所抄類字名寄松葉歌林並に載せしと

丈木集よ云ふ千々の崎武彦

按ずるに名所崎丈木集と按りて収むといふも名所集より

よとくへららぬ丈木集

けるかとも名所の崎と思ふ武彦の花ゆやま海より

以知伊津

名所抄類字名寄松葉歌林並に載せしと

丈木集よ云ふいらの一作 標井津武彦

按ずるにいらは津丈木集と按りて収むといふも其
所詳なり

讀人志らぬ 名所集

さうあはゆるさむいいら津のむらうらうらきりあむは

氷川

名寄松葉に載しと名所抄類字歌林載せしと

史本集よまこりりの八武彦又安房備前

按よるよ今備前よまほり河といふや一國山の城
りよあるる川大川とも新白川ともいふゆとを皷
川といひ〜とを皷と氷と列をよれはこりりかを皷
前とあるせ〜も也

藤原まよま氷川武州

武州遊まよま入間郡氷川村よ出る室に流あり河
系と古奇よま極き〜西より則て氷川の上流こりり
按よるふこほり川甚而詳な〜及是是郡大宮に氷川
神社ありとむつ〜といふ神号ハゆと出雲國氷川
よりゆ〜まよと將集大社の神をうつ〜まほり〜

よりなれハけ地の川名よまあるたかろ〜とされ風土
記に皷川郷皷川系と載されハその〜とよて神名
ふより〜地をもかく呼ひ〜とゆよて皷と氷と訓
お通とれハ延喜式風土記等よま氷川神社と載こ
まよこほり川と六呼ハさるは備前よま今國山の城下
をなろる俗ふ大川とも新白川とも呼よけ川ゆと
皷川といひ〜とこほり川と六とあるとよその國の人ハ
ゆりかれこほり〜かうの合とれハ皷より〜と氷と
轉〜つあここほり〜ハあやまほりならん志れ〜も史本
集以下にこほり川とありハ中ゆ〜よりよか〜ら
はけこ氷川といひ〜もあら〜もま〜も〜も

ついで今大宮の氷川神社のなりと云ふに云ふ川もあ
けまなり〜云々の事あり〜見沼といふ池のなれ
るに風土記に載せる鯨川系にてもありん此見沼に
り六三里といふ事大池ありり其保の頭高田與清
の祖高田友清といひ一人その任にあたりり新田に
ゆきき〜と云ふ石氏の遊多に入間郡氷川村の流
之といふ事延喜式に載せる中氷川神社ある地を
まはす流接かき〜とあり〜と云ふ郡未勘の事あり
冬これとあらせも云ふに氷川うへをかきと見えわきうつ

祐子内親王家紀伊文木集

源式部

氷川氷底のく〜とら〜く〜り〜とや〜か〜ら〜り〜も〜つ〜え〜

讀人〜ら使

うらとをそ氷も結〜とら〜り〜河志〜ある事や〜の〜ん

同

字〜とむみ月の事〜の〜ら〜り〜と〜河志〜ある事や〜の〜ん

曝井

名寄松葉に紀伊と云名不抄類字歌林載せと

翁葉集に云那賀郡曝井歌一首

拾穂抄に那賀に紀伊の郡の名之或説に武彦の那珂
郡といふとみ代哥枕八雲御抄等曝井紀伊と云又

代通記に此曝井を八雲所抄とて紀伊と注せし勢
強り凡たこの郡といふを國とて同名抄りて紀伊
阿波伊豆石見讃岐不押のく郡賀郡ありその中に
紀伊と賀の字濁音によむべきこと一和名抄に注せ
らる彼等のもの八南鷄の二字此ことく中傳り今の奇
名中にむらるとよむことこれ八紀別郡賀とあるぬあや
たしく徳國ともふ中部の心多る紙紀伊と賀とよむ
形すりて濁音よとよむことなる例よかなるれ又抄り
郡賀といふこととも長郡といふことくあつたこれ八濁音
とて注せしれざる歟知かす武蔵常陸讃岐筑前
日向よ押のく郡賀郡あり郡賀と郡珂とあられとも

心をいつきても中の字なることこれ古の奇に武蔵
小埜沼と懸しとてとけと次之の二音もむすこと
へとてやかきやうも後ちとてよれるやうなれぬ
かゝるぬ事抄りていんやむりて奇なるを也

常陸國風土記に云那賀郡自郡東北挾粟河而置驛
家當其以南泉出坂中多流尤清謂之曝井縁泉所居
村落婦女夏月會集浣布曝乾

八雲所抄に云とて井紀伊

武蔵志料に云とてり云云此奇の上武蔵小埜沼と注る
奇何れも此奇も又武蔵の西なる事知るべし一尤は奇作
者不知なり曝井と地名なり井の名は八河とて俗説

は新井と云々も六月井成後三紙を有八辭るなり
按とらふ曝井常陸風土記八雲降抄以下と云れ
断して本州の名所とありて是と云々も拾穂抄及志料
の説より世人感ハ本州と云々此と云々ハあはれ
志と云々く是末に附くその非と云々此と云々

よみ人〜ら及 弟集

みはくらの中よ向ふ曝井此絶は海らんそと云々

右郡末勘

前之頭は殿を漢乃日本此書の数
あはれ巻々昭々り見あまらぬは
師力に録りまつるに世おぬけ
めては考へこもあまらぬ集
武藏名所考と名録ははこの國
いと廣らふ大さかれは名所
定ふ志る人あはれ都人の傳
すてあまらぬ書を作れり

あれと角田の河舟浮るさこもあられハ
待乳山北真果とは志れうもふと百年の
後よりうかい須田北渡りの廢れたらんと
雲の関のせれあへん堀蕙の井の深く患ひて
淺葉北小野の淺うらぬ山田のをやまぬ忠
誠心は二股川の二股たのこもふを狭山の
池北ちやけろ考へおへ四巻とながい
うることは玉河北玉と老とおまへく田圃の

思ひうき魚へはるむい北崎玉の津北
幸いさゆいと海へからふを御倉よ
ぬみ飛米にまむとれ本意あたこら
せらおれい乞奉會様末ふる中うとあた
人うあたうおふなむをれさふふ魚を
言乃葉をあらうををせめてりさこの
思ふふもたよもかきおへはるる
御側近くはうらる藤原直彦舟

文政七年甲申夏四月

發行所

江戸日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

同下谷池之端仲町

須原屋伊八



